Z32-B88

大正九年十月一日發行
大正九年九月五日印刷納本

修監　馬生島友　村藤崎島

船の金

世界名作童話集

ランセルデンア

七月号

第十巻
第七号

第一周年記念

国立国会図書館
6. 3.
図書

アンデルセン

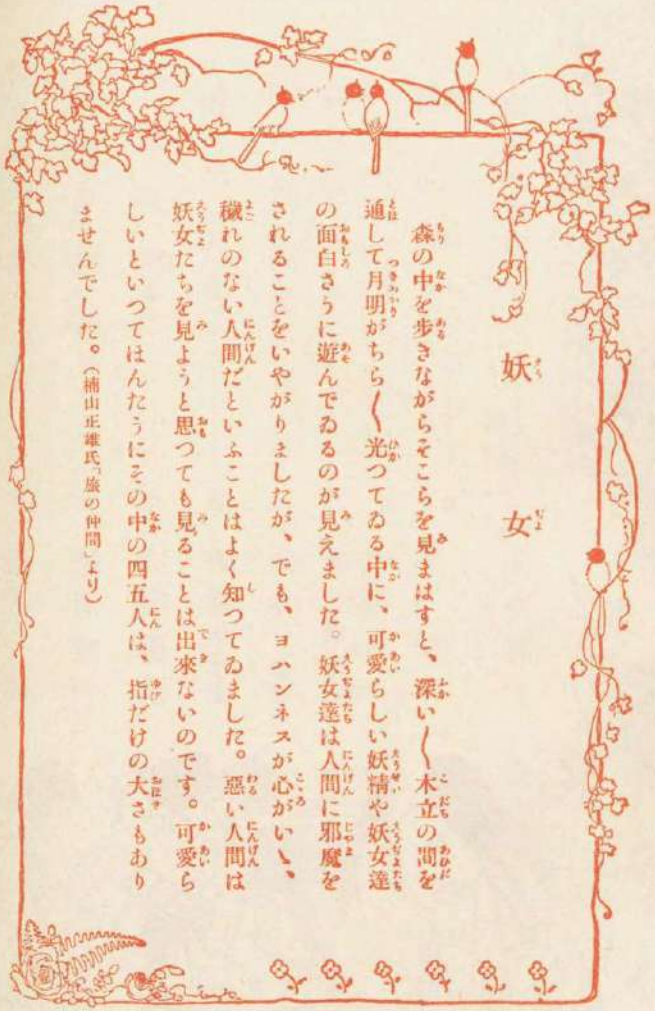
アンデルセンの生ひ立ち

世界中で、一番面白い童話を書いたアンデルセンは、今から百年あまり前デンマークといふ歐羅巴の北の方の國で生れました。お父さんは貧乏な靴直しでしたから、學校の事にはあまり注意をしなかつたので、アンデルセンはきちんとした教育を受けませんでした。ある時、遊び仲間の一人の少女が「私は大きくなつたら、田舎の立派な家の乳搾りの女になりたい。」といひました。すると、聞いてゐたアンデルセンが「僕が大人になつたら、僕のお城へお出でよ。乳搾りの女にしてやるから。」といつて、石板の上へ自分の少女の方はあつけにとられて「お前さんは、氣狂ひだ」と、いひました。もの絵をかきました。

此の時からアルデンセンは、大くなつてから立派なお話作者になるだけあつく、變つた子供でありました。十一歳の時には、お父さんに死なれました。間もなく継父さんを持つやうになりましたが、その頃から都へ行つて何かしようと思ひ立ち、お母さんにも別れて、小さな馬車に乗つて唯一人で出かけて行きました。都へ行つてからも、貧乏暮しをしてゐました。その頃、自分一人の慰めにしたり、友人のこども達を喜ばしたりしようと思つて、童話を書きました。それが忽ち有名になつて、アンデルセンの名を知らない者のない程になりました。アンデルセンは七十で死にましたが、この貧乏な靴直しの子が書いた童話は、世界の隅まで廣りました。世界のある限この小父さんの書いた話は、子供達をどんなに喜ばせる事でせう。

「金の船」十月號（第二卷第十號 アンデルセン號）

花のお家（表紙、石版刷）……岡本歸一
アンデルセン（童謠、曲譜）……野口雨情 本居長世
旅の仲間（童話）……二……楠山正雄
人魚ものがたり（童話）……三……西條八十
高飛競爭（繪ばなし）……四……岡本歸一
はだかの王樣（童話劇）……四六……長田秀雄
雀から聞いた話（童話）……六〇……齋藤佐次郎
燒パンを踏んだ娘（童話）……六三……吉田絃二郎
ハンスの馬鹿（童話）……七九……山本午後
バタ屋の妖精さん（童話）……八〇……田中純
お月樣が見て來た話（繪ばなし）……八六……船橋重一
獨樂と毬（童話）……八八……三宅房子
草の露（童謠）……九〇……野口雨情選
門（自由畫）……九二……山本鼎選
ばくろさん（幼年詩）……九二……若山牧水選
どせうとり（綴方）……九三
通信……九四
口繪（原色版）挿繪（凸版）……岡本歸一



妖女

森の中を歩きながらそこらを見まはすと、深い〳〵木立の間を通して月明かちら〳〵光つてゐる中に、可愛らしい妖精や妖女達の面白さうに遊んでゐるのが見えました。妖女達は人間に邪魔をされることをいやがりましたが、でも、ヨハンネスが心がいゝ、穢れのない人間だといふことはよく知つてゐました。惡い人間は妖女たちを見ようと思つても見ることは出來ないのです。可愛らしいといつてはんたうにその中の四五人は、指だけの大さもありませんでした。（補山正雄氏「旅の仲間」より）

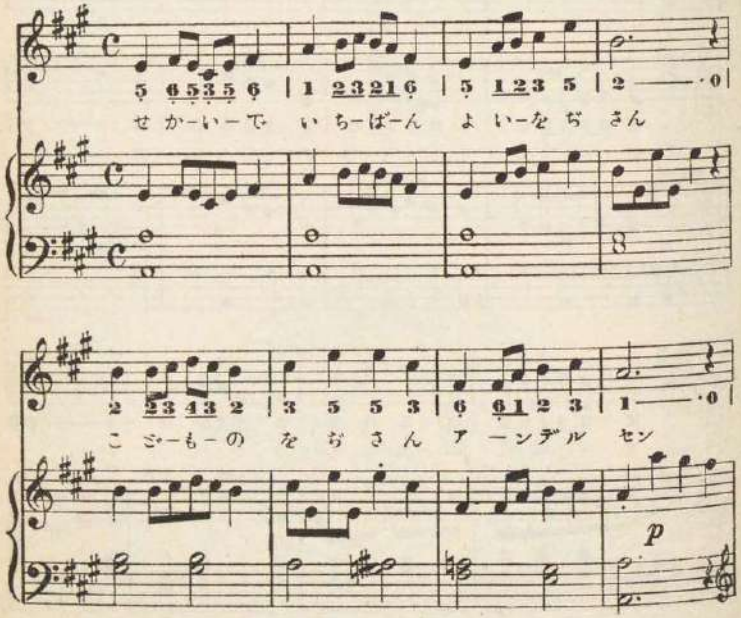
ア　ン　デ　ル　セ　ン

（本居長世作曲　野口雨情作謠）

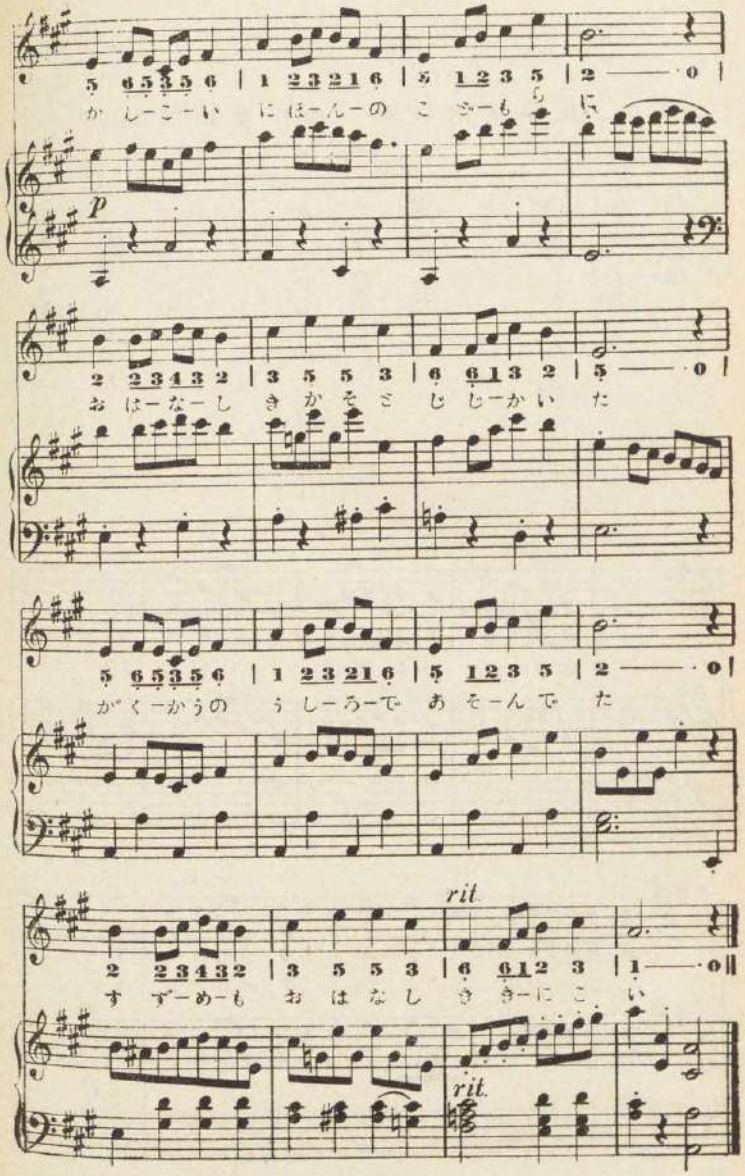
世界で一番　よい小父さん
子供の　小父さん
アンデルセン

かしこい日本の　子供らに
お話　聞かそと
字々かいた

學校の　うしろで遊んでだ
雀ち　お話
聞きに來い



世界名作童話集


5 6535 6 | 1 2321 6 | 5 123 5 | 2 — 0 |
かしーこーい にほーんーの こぞーもらに
p
2 2343 2 | 3 5 5 3 | 6 613 2 | 5 — 0 |
おはーなーし きかそ じじーかいた
5 6535 6 | 1 2321 6 | 5 123 5 | 2 — 0 |
がくーかうの うしーろーで あそーんで た
rit.
2 2343 2 | 3 5 5 3 | 6 612 3 | 1 — 0 ||
すずーめーも おはなし ききーにこい
rit.

旅の仲間

楠山正雄

一

可哀さうなヨハンネスは、父親がひどくわづらつて、今日明日を知れないほどでしたから、どんなに悲しく思つたでせう。テーブルの上のランプは、今にも消えさうに瞬きをして、夜ももうだいぶ更けてゐました。

『ヨハンネスや、お前はいゝ息子だつたから、これから世の中へ出ても神さまがきつと何かをよくして下さるよ。』と病人の父親はいひました。さうしてやさしい目でじつと見ながら、深いため息を一つすると、そのまゝやがて息を引取りました。それはまるですや〳〵眠つてゐるやうでしたが、でもヨハンネスは泣かずにはゐられませんでした。この子はもうこの世の中に、父親もなければ母親もない、男のきやうだいも女のきやうだいもないのです。可哀さうなヨハンネス。ヨハンネスは寝臺の前に突

伏したまゝ、死んだ父親の手にキスしては、熱い涙をとめどなく流してゐました。その中いつか目をつぶつて、寝臺の堅い柱に頭を押付けたなり、ぐつすり寝込んでしまひました。

寝てゐる中にヨハンネスはふしぎな夢を見ました。日と月とが目の前に下りて來て、死んだ筈の父親が達者で元氣よく、いつもうれしいことがあるとき笑ふやうな顔付をして笑つてゐるのです。すると長い美しい髪の上に金の冠をかぶつた、それは美しい娘がヨハンネスに向つて白い手を差しのべました。その時父親が、

『ごらん、何といふいゝお嫁をお前はもらつたのだ。この子は世界中で一ばん美しい娘だよ。』といひました。おやと思つて、ヨハンネスはふと目がさめました。美しい夢はかげも形もなく消えてしまつて、父親は死んで冷たくなつて寝臺の上にねてゐました。誰一人傍にはゐませんでした。何て可哀さうなヨハンネスでせう。

二

それから一週間立つて、死人をお墓に埋葬することになりました。ヨハンネスはぴつたり棺のうしろについて行つても、もうあれほどやさしくしてくれた父親と、顔と顔を見合せることもできないのでした。棺の上にばら〳〵と土の塊が崩れおちて行く音もヨハンネスは聞きました。見る〳〵墓穴は土でふさがつてしまひました。これを見てゐる中に、胸の中に一ぱい悲しみがこみ上げて來て今にも

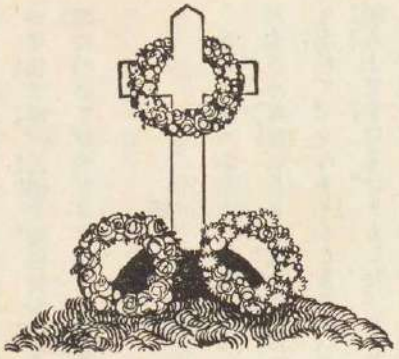
はち切れさうに思ひました。坊さんたちの讃美歌の合唱を聞いてゐる中に、目の中に涙がわき出して來ました。それで泣きたいだけ泣くと、却つて心持がはつきりして來ました。その時太陽が森の青葉の上からにこ〳〵笑ひかけて、

『ヨハンネス、そんなにお泣きでないよ。まあ青々した綺麗な空をごらん。今頃はお前のとうさんもあそこの高いところに昇つて、どうかお前が爲合せになれるやうに、神さまに、お願ひしてゐるのだよ。』と言つてゐるやうでした。

その時ヨハンネスは云ひました。『わたしはあくまでいゝ人にならう。さうすればまた天國でとうさんに會へるし、會へばまたどんなに樂しくなれるだらう。どんなにたくさん話をすることがあるだらう。さうしてとうさんもまたわたしにきつとそれはいろ〳〵のことを敎へてくれるに違ひない。天國の立派な所も見せてくれるにちがひない。その代りわたしは地の上の話をたくさんにしてあげよう。まあそれはどんなに樂しいことだらう。』

ヨハンネスはかうはつきりと、獨言を云つてみて誰も居ないのに氣がついて思はず笑ひ出しました。そのそばから涙が止めどなく頬の上をつたはりました。頭の上の栗の木の中で小鳥がちつちくち、ちつちくち囀つてゐました。これは死人の埋められた墓穴のそばにゐながら、いかにも面白さうでした。でもこれは死んだ人が、今頃は高い天國にのぼつて、自分達よりももつと綺麗な、もつと大きな羽が生えて、この上なく幸福にしてゐることを知つてゐたからでした。

ヨハンネスは、小鳥達が森の梢をはなれて、遠い世界へとんで行く姿を見て、自分も一緒に飛んで行きたくなりました。けれどもさし當りは、大きな木の十字架を切つて、それを父親のお墓に立てなければなりませんでした。さて晩になつてそれを切つてもつて行きますと、どうでせう、お墓はまあるく砂が盛り上がつて、きれいな花で飾られてゐるではありませんか。それはよその知らない人たちがしてくれたのです。ヨハンネスのとうさんはいゝ人でしたから、知らない人達にずゐぶん好かれてゐたのです。



三

さて明くる日の朝早くヨハンネスは僅かばかりの荷物をとりまとめ、財布の中にはのこつた財産の五十圓と一二枚の銀貨をのこらず入れて、これだけであてもなしに世の中に出て行かうと云ふのです。

ヨハンネスがこれから出て行かうといふ廣い〳〵野には、いろいろの花が暖かな日の光に照らされて、目の醒めるやうに美しく咲いてゐました。さうして風の吹くたんびに、頭をがてん〳〵さして、それは『綠の野へあなたはよく來ましたね。こゝは隨分綺麗でせう。』と云つてゐるものゝやうでした。けれどもヨハンネスはも一度振り

返つてお名殘りに、古いお寺の建物を見ました。それはヨハンネスが子供の時、洗禮を受けたお寺でもあり、日曜日といふと極つて父親についておつとめをしたり、讃美歌を歌つたりした所でした。

四

ヨハンネスはこれから大きな、にぎやかな世間へ出て、どんなにたくさん面白いことが見られるだらうと思ひました。それで何もかも忘れて、ずん〳〵どこまでも、これまでつひぞ行つたことのない遠方まで歩いて行きました。もう自分の歩いてゐる町の名も、そこらで出逢ふ人たちの顏も知りませんでした。それほど遠方の知らない土地へ來てゐたのです。

始めての晩は野原の枯草の積んである上で寢なければなりませんでした。けれどもそれは實に寢心地がよくつて、どんな王樣だつて、これほど結構な寢床には寢ないだらうと、ヨハンネスは思つてゐました。そこには一ばん中ちよろ〳〵と小川が可愛らしい音を立ててゐましたし、ひろ〳〵とした原野のきれいな星をまきちらした青天井がひろがつてゐるし、なるほどこれは結構な寢部屋でした。赤だの白だのゝ小さな花の咲いた青い草が敷物で、接骨木花の叢や野

薔薇の茂みがその部屋の花でした。さうして手水盥の代りに、小川が水晶のやうなきれいな水を流してくれます。蘆や葭がそこゝで風にさゝやいては、おやすみを云つたりお早うを云つたりしてくれました。おまけにお月さまが恐しく大きなランプを高い空の上でかん〳〵ともしてゐてくれました。ヨハンネスはもうまるつきり心配なしに眠ることが出來ました。それでやつと目がさめると、太陽はとうにのぼつて、ありつたけの小鳥がまはりで歌を歌つてゐました。

『おはよう、おはよう。あなたはまだ起きないの。』

お寺で鐘がかん〳〵なつてゐました。ちやうど日曜日で、近所の人たちがお寺へお祈りにぞろ〳〵出かけて行きます。ヨハンネスもそのあとからついて行つて讃美歌の合唱に交つて神樣のお聲を聞きました。さうする中に、それが自分の生れた村で、洗禮を受けたり、父親に連れられて讃美歌を一緒に歌つた子供の時からおなじみの深いお寺の中にゐるやうな氣になつたのです。

外の墓地には澤山のお墓が並んでゐて、大抵は高い草の中に埋つてゐました。それをみるとヨハンネスは、自分の父親のお墓も掃除をしてお花をあげるものがなければ、いつかやはりこんな風になつてしまふのだらうと思つて悲しくなりました。そこでヨハンネスは墓地へ下りて行つて、草を拔いてやつたり、飛び出してゐる十字架をまつすぐに直してやつたり、風でお墓から吹きとんでゐる花束をまたもとの通りに直してやつたりしながら、『わたしが自分でやれない代りには、とうさんのお墓にも、誰かゞ同じことをしておいてくれるかも知れない。』と考へてゐました。

お寺の門の前に一人、年寄の乞食が居て、撞木杖に縋つてゐました。ヨハンネスはそれに銀貨を二つやつて、すつかり愉快に元氣よくなつて、またずん〳〵廣い世界へ進んで行きました。

五

夕方になると、大へん惡いお天氣になりました。ヨハンネスはどこか宿を搜さうと思つて、どんどん道を急ぎましたが、その中間もなく、もう一寸先も見えない闇になりました。でもどうやら小山の上にぽつつり建つてゐる小さなお堂に辿りつきました。潜りが爲合せと半分あいてゐましたから、そこからそつと入りました。そこで今夜はあらしを避けようと思つたのです。

『もう隨分疲れてゐる。休まずには居られない。』かう云つて、ヨハンネスはお堂の隅に轉がつて、兩手を組み合せて晩のお祈を云ひました。さうしていつか知らない間に、寢こんで夢を見てゐました。その間に、外ではかみなりがなつたり、いなづまが走つたりしてゐました。やつと自が醒めて見ると、もう眞夜中で、あらしはすつかりやんで、月が窓からかん〳〵さしこんでゐました。ふいと見ると、本堂の眞中に、死人を入れた棺が、蓋をあけたまゝ葬らずにおいてありました。ヨハンネスは正直な心の子でしたから、死人をこはがることはありませんでした。それに死人が何も惡いことをする筈がないと思つて居ました。惡いことをするのは、生きてゐる惡い人たちです。ちやうどさういふ生きてゐる惡い人たちの仲間が二人、死人の棚についてゐました。死人の棚のすまない前に、そつとお寺へ

入つて來たのです。それも死んだ人を悲しむために來たのではなくつて、氣の毒な死人を犬猫のやうにお寺の外へ捨てに來たのです。

『なぜあなた方はそんなことをするのでせう。』ヨハンネスは聲をかけました。『それはよくないことです。エス樣のお名にかけて、どうぞそつとしておいて下さい。』

『やい、よけいな事を云ふな。』とその二人の男はいつて、こはい眼でヨハンネスをにらめつけました。『こいつはおれたちをひどいめにあはせたのだ。おれたちから金を借りて、一文も返さないまゝで死んでしまつたのだ。だから仇をとつてやるのだ。寺の外にはやま犬が待つてゐるだらう。』

『わたしはこゝに五十圓しかお金がありません。これはわたしのありつたけの財產です。これをそつくりあなた方にあげますから、その代り決して可哀さうな死人をいぢめないと約束して下さい。わたしは、なあにお金はなくつてもかまひません。それにはわたしは手足が達者ですし、神樣も始終守つ

て下さるでせうから。』

すると怠らしい男どもはいひました。

『さうか。貴樣がほんたうにその金を拂ふなら、おれたちも決して手出しはしない。安心してゐるがいゝ。』かう云つて二人はヨハンネスの出したお金を受けとつて、お人よしを笑ひ〳〵どこかへ出て行きました。でもヨハンネスは、死人をまたそつと棺の中に收めて、その手を組ませ、さやうならをいつてこん度もまたすつかり明るい、いゝ心持になつて、大きな森の中をどんどん進んで行きました。

六

森の中を歩きながら、そこらを見まはすと、深い〳〵木立の間を通して月明りがちら〳〵光つてゐる中に、可愛らしい妖精や妖女達の面白さうに遊んでゐるのが見えました。妖女達は人間に邪魔をされることをいやがりましたが、でもヨハンネスが心のいゝ穢れのない人間だといふことはよく知つてゐました。惡い人間は妖女たちを見ようと思つても見ることは出來ないのです。可愛らしいといつて、ほんたうにその中の四五人は、指だけの大きさもありませんでしたが、長い金茶色の髪の毛を、金の櫛で梳いてゐました。二人づつ木の葉や、高い草の上の大きな露の中でゆ

ら〳〵ゆられてゐました。時々露がぽたりとこぼれがりだして、ひよろ長い草の葉の間で止まります、するとそのたんびにきつとこの小さな人たちの中から、はち切れさうな笑ひ聲と鬨の聲がおこります。それは隨分おどけてゐました。

そのうちみんな歌を歌ひ出しましたが、聞いてゐるうちにヨハンネスは、子供の時分覺えたいろいろ面白い節をはつきりと思ひ出しました。銀の冠をかぶつた大きな斑ら色の蜘蛛が、こちらの垣から、向ふの長い釣橋や、お城にせつせと綱をはり渡してゐました。やがてきれいな露がその上に落ちると、明るい月の光に照つて、ガラスのやうにきら〳〵光りました。

やがて明くる日の朝日が森の梢からさし込みました。すると小さな妖女たちは、花の蕾の中にもぐりこんで、すゞしい朝の風がその釣橋やお城を吹きとばしてしまひました。

七

ヨハンネスはやがて森を出ぬけると、しつかりした男の聲で後から聲をかけるものがありました。

『もし〳〵、あなたはどこまで旅をします。』

『廣い世界へ出て行きます。わたしには父親もなければ、母親もありません。貧乏な若者ですが、神樣はきつと守つて下さるでせう。』

『わたしも廣い世界に出て行かうと思ふ。』

とその見知らない人はいひました。

『一番二人で仲間になつて、旅に出かけませう。』

『えゝ〳〵、結構です。』

とヨハンネスもいひました。

そこで二人は一緒に出かけることになりました。二人は直きに仲よしになりました。なぜと云つて、二人ともいゝ人達だつたからです。たゞヨハンネスは、この知らない道連れが自分よりも遙かに賢い人だといふことに氣がつきました。この人は殆ど世界中を旅行して、大抵のことは話が出來ました。

日がもう隨分高くのぼつた頃、二人は大きな木の下に坐つて、朝飯を食べようとして、ふと見ると、そこへ一人のおばあさんが歩いて來ました。それは非常に年をとつて、腰が曲つてゐました。おばあさんはよぼ〳〵杖に縋つて、森の中で拾ひあつめた薪の束を腰にしよつてゐましたが、そこから三本、半分と柳の棒がのぞき出てゐました。

二人のゐる前をちよこ〳〵と通んで歩いて行くと思ふと、ふと躓かにつまづいて倒れながら、きやつと高い聲を立てました。可哀さうに足の骨が折れたのです。

ヨハンネスはその時、おばあさんをおぶつて、住居まで送つて行つてやらうといひ出しました。すると道連れの人は頭をふり〳〵、背嚢をあけて小箱を出し、この中に入つてゐる膏藥をつければすぐと創が直つて、まるで足の骨が折れたことなんぞはないやうにして家へ返してあげる、その代り、腰にさした三本の棒をお禮にくれないかといひました。

『それはずゐぶん高いお禮だねえ。』とおばあさんはいつて、なぜだか奇妙に頭を振りました。それでなか〳〵その棒を手放したがらない樣子でしたが、折れた足のまゝ、そこに倒れてゐることはむろんありがたいことでもありませんでしたから、とう〳〵棒をゆづることになつて、その代り足の方は、膏藥をつけると一緒にけろりと直つて、前よりもしやん〳〵歩けるやうになりました。これは膏藥のふしぎなきゝめでした。とても藥屋なぞで手に入るものではありません。

『そんな箒みたいなもの、なんにするんです。』とヨハンネスは旅の仲間に聞きました。

『うん、やはり結構な箒が三本さ。こんなものをほしがるわたしはよつぽど變りものだね。』と仲間はいひました。

さてそれからまた、可なりの道のりを行きました。

『どらんなさい。ひどい天氣になつた。』とヨハンネスはいつて、向ふの方を指さしました。『むく〳〵

氣味の惡いやうな黑い雲ですね。』

『いゝや。』と旅の仲間はいひました。『あれは雲ではない。大きな山續きだよ。あれは雲よりもずつと上のまるつきり山の空氣だけの所にあるのだよ。どんなにそこは美しいだらう。あしたはもうその山の上にゐるのだ。』

それはちよいとながめたほどさう近くはありませんでした。まる一日たつぷり歩いてやつと山の麓につきました。見上げると、峯の上にまつ黑な森が、空に向つて一つ立つてゐて、町位の大きさのある岩が幾つも幾つも並んでゐました。それへのぼるには隨分汗の出ることでしたから、ヨハンネスと旅の仲間は、麓の宿屋に一晩とまつて、ゆつくり休んで、あしたの山登りの元氣を養ふことにしました。

八

さてその宿屋の大きな食堂には、たくさんの人が集つてゐました。旅まはりの人形使ひが小さな芝居小屋をそこにこしらへて、みんながそれをとりまいて狂言を見ようとしてゐるのです。その中で一番上等の場所は、肥つたぢいさんの肉屋が占領してゐました。そのつれてゐるブルドックは、まあ何と云ふ憎らしい、くひつきさうな顏をしてゐるのでせう。それが主人のわきに高慢らしく坐つて、ほかの人間たちと同樣に目を丸くしてゐました。

その肉芝居がはじまりましたが、それは王樣と女王樣のなかなか面白い芝居で、二人の陛下はビロードの玉座に腰をかけて、金の冠をかぶつて、長い裾をひいてゐました。ガラスの目玉を嵌めて、大きなうは髯を生した、可愛らしいでくの坊が方々の扉口に立つて、しめたり開けたり、部屋の中に涼しい風が入るやうにしてゐました。その中女王樣は立ち上がつて、床の上をそろ〳〵と歩き出しました。それをまあ例のブルドックは、一體何と思つたのでせうか。主人の肥つた肉屋がおさへてゐなかつたものですから、のそ〳〵舞臺へ歩き出して來て、おやといふ間もなく、女王の細い腰をばつくり咬みました。がり〳〵いふ音がはつきり聞えました。それは全く恐しいやうでした。

かあいさうに、人形芝居の持主は、すつかりしよげて、女王樣の人形を抱いて泣き出しました。それは人形の中でも一番可愛らしい人形でしたのに、憎らしいブルドックのために腰をかじられてしまつたのです。

けれども、みんな見物が散つてしまつたあとで、ヨハンネスと一緒に來てゐた旅の仲間は、こんど

もその創をなほしてやらうと人形使に云ひました。さう云つて箱をあけて、おばあさんの足をなほしてやつたあの膏藥を出しました。人形は膏藥をぬつてもらふと、すぐによくなつて、おまけに手足が自分で達者に動くやうになりました。もう絲でつることもいらなくなりました。人形はまるで生きた人のやうでした。人形使ひはどんなによろこんだでせう。人形を使はないでも、人形は勝手に自分で踊ををどるのです。

その中、夜中になつて、宿屋にとまつた人たちがみんな寢しづまる頃になつて、どこかでしく〳〵啜り泣く聲がして、いつまでもやめないものですから、みんな氣にして起きあがつて、一體だれが泣いてゐるのか見ようとしました。どうも泣聲が人形芝居の舞臺の方でするものですから、人形使ひの男は、のこ〳〵出かけて行つて見ますと、木の人形たちは、王樣も近衞兵も一緒になつてころがつて、しく〳〵泣きながら、大きなガラス目玉できよろ〳〵見てゐました。この人形たちも女王樣と同じやうに膏藥をぬつてもらつて、自分で勝手に歩く力を授けてもらひたいと思つてゐました。そのそばで女王樣は膝をついて、立派な金の冠を頭にのせたまゝ、お祈をしてゐました。

『どうぞわたくしから歩く力をおとりなすつても夫と家來たちに膏藥をさづけてやつて下さいまし。』

人形使ひはそれを聞くと、止めどなく涙を流しました。それで旅の仲間の所へやつて來て、あしたの晩の興行のあがり高をのこらずあげるから、どうぞせめて四つでも五つでもいゝ人形に膏藥をぬつてやつて下さいといつて頼みました。けれども旅の仲間は、そんなものよりも、人形使ひが腰につるしてゐる大きな鉈をくれといひました。

人形使ひに劍をもらつて、旅の仲間は六つの人形に膏藥をぬつてやりますと、人形たちはすぐに踊ををどり出して、その踊のうまいこと、それをみてゐる人間の娘たちまでが一緒に踊ををどり出さずにはゐられない位でした。御者と料理番の女も手をつなぎ合つて、踊り出しました。下男と女中も、それから、十能と火箸まで組になつて踊り出しました。けれどこの二人は一足とび上がると、すぐぶつ倒れてしまひました。じつさい、それは面白い一夜でした。

九

その次の朝、ヨハンネスは旅の仲間と一緒に、みんなから別れて、高い山をのぼつて行きました。大きな樅の森を通つて山道にかゝつて、ぐん〳〵登つて行く中に、いつかお寺の塔がずつと目の下になつて、見わたす限り青い草の中にぽつゝり一つ小さい赤い苺の實がなつてゐるやうでした。それから又何里も、何里ものぼつて、もういよ〳〵何にも見えない所へまで來ました。美しいといつてこれほど美しい世界を、ヨハンネスはまだ知りませんでした。太陽は晴れた青空の上にやさしく輝い

て、峰と峰との間から獵師のふく角笛がいかにも面白く聞えました。ヨハンネスは聞いてゐる中に、もうれし涙が目の中にあふれ出して、思はず口に出して叫びました。

『おゝ有難い神樣、こんなにいゝことをわたしたちにして下すつて、この世の中にこんなにまで美しいものを見せて下さるあなたにキッスして上げたくなりました。』

旅の仲間もやはり手を組んだまゝ、そこに立つて、あたゝかな太陽の光を浴びてゐる麓の森や町を眺めてゐました。ふと頭の上で不思議なかはいらしい聲がしました。二人は仰向いて見ると、大きな白鳥が空の上を舞つてゐました。その歌ふ聲はいかにも美しくつて、とてもかの鳥にまねられるやうなものではありません。けれどもその歌はだん〳〵弱くなつて來て、やがて首をうなだれると、それはごく靜かに下に落ちて來ました。さうしてこの美しい鳥は死んでしまひました。

『きれいな羽が二つできた。』と旅の仲間は云ひました。『こんな白い大きな羽は隨分お金になるだらう。見給へ、劍をもらつて來ていゝことをしたから。』

さう云ひながら、旅の仲間は死んだ鳥の羽をおさへて、わけなく切り落してしまひました。

十

さて二人はまた何里も、何里も、山を登つて行つて、とう〳〵大きな町へ出ました。そこには何百といふ塔が日に輝いて、銀のやうにきら〳〵してゐました。町の眞中には立派な大理石のお城があつて、金がピカ〳〵光つてゐました。それは王樣のお住居でした。

ヨハンネスと旅の仲間は、すぐに町へ入らうとはしないで、お城のくるわ外にある一軒の宿屋にとまりました。そこですつかり旅のよごれを落して、立派になつて、町へ乘り込まうといふのです。宿屋の亭主の話では、王樣といふ人はやさしい、いゝ人で、子供もなづくほどですが、王女はそれとちがつて、それはいけない王女だといふのです。器量がすばらしく美しいくせに、惡い魔法使の女で、もうそのために何人となく立派な王子たちが命をなくしてゐるのです。それは誰でも、王子であらうが、乞食であらうが、お城へ出かけて行つて、この王女に結婚を申しこむことは自由でしたが、その代り王女がたづねる三つのことを答へなければなりませ

んでした。その問に答へることが出來れば、王女をお嫁に貰ふことも出來るし、とうさまの王樣がおかくれになつたあとでは、その國をのこらずもらふことが出來るのです。けれども三つのことが答へられなければ。その男は首を絞められるか、切られるかしなければなりません。王女のおとうさまの王樣は、こんなむごいことをするのを大へん悲しがつて、もう婿えらみはやめてもらひたいとたびたび云ひ出した位でしたけれど、王女は聞き入れようともしませんでした。

『いやな王女だなあ。さういふ女は棒を喰はせなければよくならない。わたしがその王樣だつたら、きつとひどくこらしてやるのに。』とヨハンネスはいひました。

かう云つてゐる時、窓の外で人民が萬歳々々と呼んでゐる聲がしました。ちやうど王女が往來を通りかゝつたのです。それは實に目のさめるやうに美しい器量でしたから、みんなは惡い人だと云ふことは忘れて、萬歳を唱へたのでした。十人の綺麗な少女が眞白な絹の衣裳を着、手に金色の鬱金粉の花をもつて、まつ黑な馬にのつて、兩脇についてゐました。王女はダイヤモンドとルビーで飾つた雪のやうに白い馬に乘つて、純金で飾つた馬乘り服を着て、手に持つた鞭をふるたんびに太陽の光のやうにかゞやきました。頭にかぶつた金の冠は、空の星のやうで、そのマントは何千とないきれいな蝶蝶の羽を集めて織つたものでした。でもその美しい衣裳よりもはるかに美しいのは、王女の顏とすがたでした。

ヨハンネスは王女を見ると、顏ざはまで赤くなつて、一言も口が利けません。まあこの王女は父親

の亡くなつた處、ヨハンネスが夢にみたあの金の冠の美しい娘に似てゐるのです。もうこんなにも美しい人が世の中にあるかと思つて、ヨハンネスはすぐと王女が大すきになつてしまひました。これがあのむづかしい問を出して、人の首をしめたり、首を切つたりする惡い魔女だらうとは、どうしても思はれませんでした。

『だれでもこの人に結婚を申しこむことが許されてゐる。それはこの上ない、みじめな乞食でもいゝのだ。わたしもほんたうにお城へ出かけてみよう。どうしたつて行かずにはゐられない。』

ヨハンネスはかういつてゐました。みんなはそれは思ひ止まるがいゝ。ほかの者と同樣氣の毒なことになるからと云ひました。旅の仲間もやはりさう云つて止めましたが、ヨハンネスはどうしても聞かないで、もうずん〳〵靴を穿いて、上着を着て、綺麗な金髮を梳いて、それから一人で町へ出かけて行つてお城の門を叩きました。

『おはいり。』

ヨハンネスが扉を叩くと、王樣がいひました。王樣は、寢卷に縫ひ取りをした靴下をはいて出迎へました。金の冠を頭に冠つて、片手に笏、片手に玉をもつてゐました。

『およし。今に悔んでも追つゝかないことになる。』

ヨハンネスの用向を聞くと、王樣はかう云つて、涙ぐんでゐましたが、それでもヨハンネスを王女の花園につれて行きました。そこはまつたく氣味の惡い樣子でした。一本々々の樹の先には三人四人

と王女に殺された王子がかたまつてぶら下がつてゐました。この人達は王女に結婚を申しこんで、王女の持出した問に答へることの出來なかつた人たちです。風が吹くたんびに、死人の骨がから〳〵鳴りました。それを小鳥たちが驚いて園の中へ遁げこむのでした。花といふ花には人間の骨が縛りつけてありました。花の頭には、しやりつ骨がのつてゐて、うらめしさうに齒をむき出してゐました。王女の花園には珍らしいものでした。

ヨハンネスは王樣の手にキッスをして、自分は王女をそれは心の底から慕つてゐるのだから、大丈夫ぐあひよく行くに違ひないと云ひました。

さういつてゐるとき、王女は召使の女たちのこらずを引きつれて入つて來ました。ヨハンネスが近くに寄つて挨拶をすると、王女は目のくらむやうな美しい笑顔で、ヨハンネスに手を出しました。この人がみんなの云ふやうにそんな惡い、憎らしい魔女である筈がありません。王樣とヨハンネスはそれから廣間へ入つて行きました。お小姓が砂糖漬や胡椒のお菓子を出しましたが、王樣は悲しくつて胡椒のお菓子も堅くつて齒にはとほりませんでした。

さてヨハンネスは、その明くる日また改めてお城へやつて來て、裁判官や評定官の大勢集つてゐるところで、試驗を受けることになりました。それで初めの日がうまく行けば、又二度めに來なければなりません。けれどもこれまで試驗はいつも一度きりでみんなしくじつて、殺されてしまふものですから、つい二度めの試驗の必要はなかつたのでした。

けれどもヨハンネスは、少しも試驗がどうなるだらうのなんのといふ心配はしません。心配するどころか大とくいで、たゞもう美しい王女のことばかり考へて、神樣がきつと自分を助けて下さるにちがひないと信じきつてゐました。それで宿屋へ歸つて行く道々も、往來を踊り〳〵とんで行きました。

ヨハンネスは待ちかねてゐた旅の仲間に向つて、どんなに王女が自分にやさしくしてくれたらう、どんなに王女が美しかつたらうといつて、息もつかずそれからそれと話し續けました。それで、あしたまたお城へ行つて、王女のかける謎を解いて、自分の運をためすことばかりを樂しみにして待ち兼ねてゐました。

けれども、旅の仲間は頭を振つて、大そう悲しさうな目をしてゐました。

『わたしは君をすいてゐる、お互ひにこれからも永く一緒に暮したいと思ふのに、これなりお別れにならなければならない。ヨハンネス、わたしは君が氣の毒で、涙が出さうで爲方がない。けれどもお互ひが一緒

たゐるのも今夜限りだから、せめてその間だけでも愉快にしてゐよう。泣くことなら、あしたの朝君が行つてしまつたあとでもゆつくり泣けるから。』

かう旅の仲間はいつてゐました。

町の人たちは殘らずもう新しい結婚の申しこみが王女の所へ來たと云ふ噂を聞いて、誰も同じやうに氣の毒がつてゐました。芝居は木戸をしめたまゝですし、料理番の女はお砂糖の人形の上に黑い喪の切れをかけました。王樣と坊さんはお寺でお祈をあげてゐました。どこを見てもみんな悲しみに浸つてゐるやうでした。それはヨハンネスも今までの人たちと違はない運命だと思はれたからです。

十一

その晩になつて、旅の仲間はボンスの大きな瓶を一本買つて來て、ヨハンネスに向ひ、今夜は一ぱん愉快にくらして、王女の健康を祝はうと云ひました。ところがヨハンネスは二杯お酒をのむともうすつかり眠くなつて、とても目をあけてゐることが出來なくなり、そのまゝぐつすり寢こんでしまひました。旅の仲間はヨハンネスを輕々と椅子から抱きあげて、寢臺にのせました。もうその時分、外は鼻をつまゝれてもわからないほどのまつくら闇でしたが、旅の仲間は白鳥から切つてとつた二本の羽をしつかりと肩につけました。さうしてあのおばあさんからもらつた三本の棒のうち一ぱん大きいのをかくしにつゝこむと、すぐひら〳〵と町の上をとんで、お城の方まで行きました。さて間もなく

王女の寢部屋の窓の下までとんで行きました。

町中はひつそりと靜まり返つてゐました。ちやうど時計は十二時十五分前でした。ふと窓があいたと思ふと、王女は大きな白のマントの上に長い眞黑な羽をつけて、ひら〳〵と外へ舞ひ上がつて、町の空を向ふの大きな山の方へととんで行きました。その時旅の仲間は、そつと見附けられないやうにかくれてゐて、王女がとんで行く、そのあとから自分も、とびながら追つかけて行つて、暗闇にまぎれて、棒で血の出るほどひどく王女をひつぱたきました。

なんといふ不思議な空の旅でせう。風が、大きな舟の帆のやうに二人のマントをふくらませて、月の光がそこから下に洩れました。

『おゝひどい霰だこと。霰だこと。』

王女は棒でぶたれるたんびにかういひました。とうとう二人は山の門に着いて、とん〳〵と扉を叩きました。いきなり雷が落ちたやうなひどい音がして、山がばつと口をあいて、王女は中へ入りました。旅の仲間もすぐあとについて入りましたが、だれにもその姿は見えませんでした。二人は大きな長い廊下を通つて行く、と、壁の兩側が奇妙にきら〳〵光りました。それは何千とない蜘蛛が壁の上を驅けまはつ

て、燃える火のやうに光つてゐるのでした。さて二人は金と銀で飾つた大廣間に入りましたが、そこには向日葵のやうに大きな赤と青の花が壁の上に浮き出してゐました。でもその花を摘むことは出來ないといふのは、その幹は氣味の惡い毒蛇で、花は恐しい復讐の火で燃えてゐる炎だつたからです。天井には螢が光つてゐるし、眞蒼な蝙蝠が黑い羽でとびまはつてゐました。何もかも不思議なことばかりでした。まん中の床の上に玉座が一つすゑてあつて、それは赤い火蜘蛛の手綱をつけた四匹の馬の骸骨の上に乘つてゐました。玉座は水色をしたガラス、その蒲團は小さな黑鼠で、その尻ッ尾をお互ひに咬み合つてゐました。その上に薔薇色の蜘蛛の巣で出來た天蓋がかけてあつて、かあいらしい綺麗な青蠅がその上に寶石のやうに散らばつてゐました。玉座の上には、年をとつた魔法使ひが、醜い頭に冠をのせ、手に笏をもつて坐つてゐました。魔法使ひは王女の額にキッスをして、立派な玉座を半分わけて坐らせますと、やがて音樂がはじまりました。大きな黑こうろぎがハーモニカを吹いて梟が太鼓の代りにおなかを叩いてゐました。それはばかげた音樂でした。小鬼どもは頭の上に氣味の惡い火をともしながら、廣間の中を舞蹈をしてまはつてゐました。でも旅の仲間には誰も氣がつきませんでしたから、ちやうど玉座のまうしろにゐて、何もかも見たり、聞いたりいたしました。

さてまたこの魔法の御殿の役人や、女官といふのは箒の柄に炭の頭をすげた化者で、魔法使ひの魔法で動いてゐるのです。

暫く舞蹈があつたあとで。王女は魔法使ひに新しい結婚の申しこみのあつたことを話して、いよい

よ明日お城へやつて來たら、例を聞いたものだらうといつて尋ねました。

『よし〳〵。』と魔法使ひはうなづいて、『わけのないことだ。まあ、それには何か極々たやすいものを選ぶ方がいゝ。さうすると却つてわからないものだ。まあお前の靴でも考へるのだな。それはあたるものではないよ。そのあとで首を切つてしまふのだ。だが明日の晩また來る時、きつとその男の目玉をぬいてもつて來ることを忘れてはならないぞ。わしが食べるのだから。』といひました。

王女は丁寧に頭を下げて、きつと目玉は忘れずに持つて參りますと云ひました。王女は山を開いて、またお城の方へとんでかへりました。旅の仲間もどこまでもそのあとについて行つて、後から力まかせに、したゝか棒で撲りつけました。それで嵐の吹く中を王女は痛がつてはあ〳〵息をつきながら、一生懸命にげて行つて、やつと寢部屋の窓から中へ入つて行きました。

族の仲間は旅屋へ歸つて見ますと、ヨハンネスは相變らずぐつすり寢こんだまゝでゐましたから、そつと羽をほどいて、自分も寢臺に横になりました。この人も今夜はずゐぶん疲れてゐました。

十二

さて明くる日まだ暗い中から、ヨハンネスは目を醒ましました。旅の仲間もやはり一緒に起きて、『君、ゆうべは實に不思議な夢を見たよ。』と云つて、それは王女とヨハンネスが靴をもつてゐて、それで何でも聞かれたら靴のことを考へろと王女が云つてゐる夢を見たと云ふのです。これは山で魔法

使から聞いて來たことですが、さうとはヨハンネスに、おくびにも出して云はなかつたのです。

『なるほど、私もさう云つて、王女に答へてやりませう。』とヨハンネスはいひました。『あなたの夢にみたことはほんたうに違ひない。神樣は私を守つてゐて下さるに違ひない。けれどもお別れの御挨拶はしておかう。私がまちがつて答へれば、もう二度とお目にかゝれないんですから。』

そこで二人はお互ひにキッスしあつて、ヨハンネスはお城の方へ向つて行きました。お城の大廣間は一ぱいに人が集つてゐて、裁判官は鴈の毛の枕のついた寢椅子に腰をかけてゐました。王樣は立ちあがつて、白いハンケチで悲しさうに目をふきました。

その時王女は入つて來ましたが昨日よりもずつと又美しくなつてゐて、みんなにそれはやさしく挨拶をしました。ヨハンネスも王女に握手を求めて、御機嫌よろしうと云ひました。

さてヨハンネスはいよ／＼王女の考へてゐる事を言ひあてる順になりました。其初めは、王女のやさしい顏と云つたらありませんでしたが、やがてヨハンネスが靴といふ言葉を云ふと、見る／＼王女の顏はまつ青になつて、體中ふる／＼震へました。全くヨハンネスは、正しく云ひあてたのです。

まあ／＼、王樣はどんなによろこびになつたでせう。みんなもうれしがつて手をたゝきました。何しろ初めてあてたのはヨハンネスでしたから、驚ぎは大へんです。旅の仲間も、ヨハンネスが首尾よくいつたといふことを聞いて、うれしがつてゐました。ヨハンネスは手を合せて神樣にお禮をのべてあとの二度も神樣のお蔭できつとうまくゆくだらうと思つてゐました。

その晩もゆふべのやうでした。ヨハンネスが眠つてゐますと、旅の仲間は王女のあとについて、山までとんで行つて、こんどは前よりももつとひどく、二本の棒で王女をぶちました。誰にもみられないで、何もかも聞いて來ました。王女はあしたは手袋のことを考へるはずでしたから、その通りをまた夢に見たやうにしてヨハンネスに話しました。ヨハンネスはこんども正しく云ひふてゝ、お城の中はよろこびの聲が溢れました。けれども王女は一人ソファーの上に横になつて、一言も物が云へませんでした。いよ／＼ヨハンネスは、三度めまで正しく云ひあてるでせうか。それがうまくゆけば、ヨハンネスは美しい王女をお嫁にもらつて、王樣が亡くなると王國を殘らずもらふことになるのです。けれどもそれをやりそこなふと生命をとられた上に魔法使ひがそのきれいな青い目玉をたべてしまふでせう。

十三

その晩もヨハンネスは早くから寢床に入つて、晩のお祈をあげて、それから靜かに眠りました。け

れども旅の仲間は、眠るどころではなく、今夜も羽を脊中につけて、劍を腰につるして、三本の棒をのこらずかくしに入れて、それからお城へとんで行きました。

外はまつくらな闇夜でした。それはひどいあらしで、屋根の煉瓦がとんで、骸骨のぶら下がつてゐる木が、風の吹くたんびに蘆の葉のやうにゆれるほどでした。もう絶えず稲光りがして、一晩中雷がごろ〳〵鳴つてゐました。王女は死人のやうな青い顔をしてゐましたが、このひどい天氣を、それでもまたあれ方が足りないと云はないばかりに笑つてゐました。その白いマントは、大きな帆のやうに勢ひよく空の上でくる〳〵廻りました。けれども旅の仲間は三本の棒でびし〳〵うしろから王女を、ぼたりぼたり血が地べたにしたゝりおちるほど撲りつけましたから、もう間もなく自由にとぶことが出來ないやうになりました。それでもどうにかかうにかやつとのことで山へ辿りつきました。

『どうもひどいあらしだつた。こんなあらしに外へ出たことはなかつた。』と王女は云ひました。

『人間はさぞいゝことがあるだらう。』と魔法使ひは云ひました。王女はその時魔法使ひに向つて、ヨハンネスが二度までも正しく云ひあてたことを話して、あしたもまたうまくやられるやうだともういよ〳〵二度と山へも來られないし、これまでのやうに魔法を使ふことが出來ない。といつて、しよげかへつた顔をしてゐました。

『こんどこそはあたらないよ。』と魔法使ひは云ひました。『あいつに決して考へられないことを思ひつかう。萬一これがわかれば、その男はわしよりもずつとえらい魔法使ひに違ひない。だがまあ、今夜

は愉快にゆくらうよ。』

さう云つて、魔法使ひは王女の兩手をとつて、小さな鬼火や、すだまやなどと一しよに輪を作つてをどりました。赤い蜘蛛は壁の上で面白さうにとびまはつて、まるで火花を散らしたやうにみえました。梟は腹鼓を叩くし、こほろぎやきり〴〵すは、ハーモニカを吹きました。それは愉快な舞蹈會でした。皆が、たつぷりをどりぬいてしまふと、王女は、

『もう早く歸らないと、お城で大騒ぎをはじめるでせう。』

といひました。そこで魔法使ひはせめてそこまで送つて行かうといつて、王女と一しよに外へ出ました。それから二人はひどいあらしの中をひゆうひゆうとんで行きますと、旅の仲間はうしろから三本の棒でびし〳〵ぶちました。この魔法使ひはこんなひどい日に外へ出たことはないといつて、ぶつ〳〵いつてゐました。

やがてお城の前で魔法使ひはいよ／＼王女と別れ際に、耳のはたに口をよせて、

『わしの首を考へてごらん。』といひました。けれども旅の仲間は、それをすらのがさず耳にしまひこんでゐました。さうして王女が窓からとびこむ、魔法使ひがもとの山に歸らうとするとたん、いきなり魔法使ひの長い鬚をつかまへると、すらり、劍をぬいてその醜い首を肩のつけねから切りおとしました。さてその死骸は湖水の魚に投げてやりましたが、首だけはよく水で洗つて、絹のハンカチにしつかりくるんで、脇にかゝへて、宿屋に歸つて寢ました。

明る朝、旅の仲間はヨハンネスにハンカチの包みを授けて、王女が自分の考へてゐるものは何だと云つて問ひをかけるまで、けしてむすびめをといてはならないと云ひました。小さなお城の廣間には、溢れるほどの人が集つてゐて、まるでお芋を洗ふやうな騒ぎでした。

『何をわたしが考へてゐますか。』と王女が問ひかけた時、ヨハンネスはいきなり夢中でハンカチの結び目をほどきますと、中から恐しい魔法使の首が現れました。王女は石像のやうになつて、床の上に倒れたなり一言も口が利けませんでした。やがて起きあがつて、ヨハンネスに『これであなたはわたしの夫です。今晩式を擧げませう。』と、王女は蟲のなくやうな聲でいひました。王樣は、にこ／＼しながら、

『わしは何よりうれしい。さつそく、さういふことにしよう。』と云ました

その祝の酒、王樣は家來をのこらず、き遇れてやつて來ました。もう遠もかれも、どこまでも喜ぶの

か、方のしれないほど喜んでゐました。

一ばんおしまひに旅の仲間が來ましたが、もうすつかり旅じたくで、杖をついて、背中に背嚢を負つてゐました。ヨハンネスは、旅の仲間の顏を見ると、涙をこぼしながら、度々キッスをして、もう旅なんかしないでこのまゝこゝに居てもらひたい、こんな爲合せな身分になつたのも、もとはみんなあなたのお蔭だからと云ひました。けれども旅の仲間は首を振つて、でもあくまでやさしい、なつかしさうな聲で云ひました。

『いゝや、いゝや。わたしのいよ／＼歸る時が來たのだ。わたしはほんの借を返したゞけだ。君は惡者どものために、辱めを受けようとしてゐた死人のことを覺えてゐますか。あの時君は持つてゐたものを殘らず惡者どもにやつて、不幸な死人が墓の中で靜かに休めるやうにして下すつた。その死人はわたしですよ。』

かう云ふが早いか、旅の仲間の姿は消えてなくなつてしまひました。

さて結婚のお祭は、まる一月も續きました。ヨハンネスと王女は、もうお互ひに心のそこから好き合つてゐました。年をとつた王樣はもう毎日樂しい日を送つてゐました。そのうち可愛らしい孫たちを幾人もお膝のまはりに集めて、笏をおもちやにさせたり、長いお鬚をひつぱらせたりして、にこにこ遊ばせておいでになりました。

ヨハンネスは、その時分もう全國の王樣でした。（をはり）

人魚ものがたり

西條八十

一

海のずつと沖へ出ますと、水があの美しい矢車菊のやうに青く、そしてまた水晶のやうに澄みわたつてゐるところがあります。かう云ふ所にかぎつてその深さは、どんな網を幾尋おろしても屆かず、またお寺の塔を幾十重ねて沈めてみてもなかなか底に着かないほどです。人魚たちはかうした海の底に住んでゐます。

海の底と云つても、なにもあの白い露骨な砂地ばかりが續いてゐるのだと想つてはいけません。そこには陸の上では到底見られない奇妙な樹や草が生え、それがいろ〳〵な美しい花を咲かせてゐます。さうして大小の魚が、まるで小鳥のやうに、その樹々の間を泳ぎまはつてゐるのです。かう云ふ林の奥に海の王樣の御殿がありました。

王樣の御殿の壁は燃えるやうな紅い珊瑚で出來てゐて、窓には琥珀のうす玻璃をはめ、屋根は眞珠を含んだ輝かしい貝で葺いてありました。王

樣には六人の王女がありましたが、皇后が數年前にお崩れになつてからは、みんな祖母樣にあたる皇太后の手で丹念に育てられてゐました。王女たちはどれも美しい姿をしてゐましたが、なかでもいちばん末の王女が際立つて美しく、その肌は薔薇の葉のやうに清らかで花車で、その兩方の瞳は深い海のやうな藍色をたゝへてゐました。たゞひとつ惜しい瑕は、その腰から下が足では無くずつと魚の尾鰭になつてゐることでした。しかしそれは、なにもこの末の王女に限つたわけではなく、ほかのどの王女たちも、いや王樣も、皇太后も、それから　の人魚の國に在んでゐる者全體がさうなのですから仕方がありませんでした。

御殿のまへには硫黄の焰の色に似た蒼白い纖い砂を敷きつめた苑がありました。お午過ぎになると王女たちは出て來てこゝで遊びました。第一の王女が鯨のかたちに咲き出るやうにと、掌に盛つた花の穗子を蒔くと、第二の王女は白い可愛いゝ指さきで小さい人魚の姿を砂の上に描いたりしました。第三第四第五の姉さんたちもみんな云ひ合せたやうに海の中の草や花や魚の繪を砂に描いたり、または沈んだ難破船から拾ひとつた奇妙な形の螺旋釘や鎖のきれはしなどを大切に持つて遊んでゐますに、いちばん末の王女だけはいつもひとりぼつち離れたところで、ぢつと頭の上の青空に似た水の層をうち仰ぎ、そこにほのかに洩れ射す薄紗に包んだ薔薇のやうな色の、人間世界の太陽の光にあくがれてゐました。

この一風變つた、無口で夢みがちな王女にとつては祖母樣の口から人間の世界の話を聽くことが何よりの樂しみでした。陸のうへに咲いてゐる花はこの海底の花とはちがつて皆いゝ匂ひがするこ

と、森や林はそれこそ目の覺めるやうな鮮かな綠いろをしてゐて、そこに飛びかふ小鳥は海の中の魚たちとは違つて、どれも美しい聲で歌ふこと、——などの話を聽かされる時には、この王女は眼を輝かせ、呼吸をはづませ、小さい胸を兩手でしつかりかゝへて、夢中になつて耳を澄ますのでした。

『おまへたちが拾五になつたらば、海から泳ぎ出て月の夜の岩の上に坐り、行きちがふ巨きな船や、人間が住む森や町を眺めることが出來るのだよ。』と、祖母樣はいつもかうした話のあとにつけ加へて、おとなしく時節を待つやうに王女たちを諭されました。

六人の王女は一つづつ順々に年齡がちがつてゐました。そこで或る年、まづ第一の王女の滿拾五歲の誕生日が來ましたので、勇ましく海の面へ浮び出て、光景を見てくることを許されました。このことを喜んだのは當の第一の王女ばかりではありませんでした。ほかの五人の王女たちも手を叩いて歡びました。と云ふのはつねゞ〳〵祖母樣の話だけではどうも聞き足りない人間の世界の美しい珍らしい噺のお土產を、今度は姉さんの口から委しく聽けるだらうと想つたからでした。

喜び勇んで出かけて行つた第一の王女は、やがて歸つて來ました。珍らしいいろ〳〵なものを見聞きした興奮に顏を赧めながら、王女は靜かな海のほとりの砂濱のうへに横つて、星のやうに燦く數知れぬ人間の町の燈火を眺め、そこから洩れてくる朗らかな音樂のひびきや、華やかな笑ひ聲に聞き惚れた昨夜の物語を妹たちにして聽かせました。妹の王女たちはその美しい噺をどんなにか熱心に聽いたでせう！　しかも誰よりも强くこの

姉王女の話に心を動かされ、ほとんど涙をこぼさんばかりに聽いてゐたのは、さなくも絕えず海の外の世界にあこがれてゐるいちばん末の王女でした。姉の話が終るとその王女はそつと獨り廊下に出でて、はるかな頭の上のうす靑い水の空に白い兩腕をさしのべ、一日も早く十五の歲が來るように神にお祈りをさゝげました。

二

次の年は第二の王女が、その次の年には第三番目がと云ふ風に、王女たちの誕生日はだん〳〵に廻つて來て、每年ひとりづつ海の面へ浮び上つてはそとの光景を見て歸つてきました。なかには夕日の光が黃金色に染めてゐる港の町の美くしい光景を見てくるもの、靜かな川岸の蘆のなかで遊んでゐる、可愛いゝ子供たちの白い踵を見てくるもの、遠い町の寺々の銀のやうな鐘の音に聽き惚れ、

櫓を拔めた海牛のやうな船の側影におどろいて水のなかへ潛り歸つて來たもの、またその誕生日がちやうど眞冬に當つたものは、濃綠の海のうへを悠々とながれてゆく大きな氷山のうへにのぼつたりして戲れて戻つてきました。たゞいちばん末の王女にだけはなか〳〵番が廻つてきませんでした。なにしろ五人の姉の番が殘らず濟むまでには、この王女は五年といふ永い月日を空しく、胸のうちに戀しい人間世界を想ひ浮べるだけで待つてゐなければなりませんでした。

一度づつ海の外の光景を見てきた姉の王女たちは、その美しい眺めが忘られないものか、それからは每日のやうに手をつなぎ合つて、見物に出かけて行きました。その間末の王女だけはひとり悄然御殿のなかに、泣きたいほどの思ひをこらへて殘つてゐました。

やがて到頭末の王女の誕生日が來ました。

『さ、おまへもこれで大人になりました。どれ姉さんたちのやうに支度をしてあげよう。』と、祖母様が云つて、その髪の毛を白い百合の花環で飾つて下さいました。待ちに待つた王女の喜びはどんなでしたらう！　身支度もそこ〳〵王女は、

『では行つてまゐります。』と、挨拶を殘して、泡沫のやうに輕々と、水面さしてのぼつて行きました。

王女がやつと水から首を出してみますと、海の上は今ちやうど日が沈んだところで、空には虞美人草の花のいろをした雲がいちめんに漂つてゐました。見ると眼の前に三本マストの巨きな船が浮んでゐ、その中から華かな樂器の音と、樂しげな歌聲が洩れてゐました。聞くともなしに王女がそのひゞきに耳を傾けてゐるうち、やがて、あたりがすつかり夜になると船の上には幾百といふ燦びやかな燈火が點されました。人魚の王女は上潮に身をのせてその船室ぢかく泳ぎ寄り、玻璃窓からなかの樣子を覗いてみました。なかには綺麗な服裝をした人たちが澤山に集つて話したり笑つたりしてゐましたが、その中でいちばん美しく人魚の眼に映つたのは黑い大きな瞳をした皇子でした。年ごろはやつと拾六ぐらゐですが、今夜はこの皇子の誕生日だといふので、船の上でこんな盛

んな夜會が催されたのでした。やがて甲板の上で水夫たちの賑やかな舞蹈が始ると同時に、幾百發となく花火が一どきに空たかくうち上げられました。數知れぬ色とり〳〵の葩と、眩ゆい寶玉の碎片とが暗い夜空に燦き飛び交すやうな華かさ、美しさ！　生れてからこんなものは見た事の無い人魚はおどろいてドボンと水の底ふかく潛り込みました。

併し人魚の胸にはこの時もうあの船室で見た皇子の美しい顏が忘られず殘つてゐました。どうしたものか一寸見たゞけの皇子が好きで好きでたまらなくなりましたが、もう一ぺん水の上へ浮んで見ますと、もはや船の上の澤山の燈火は消え、音樂の音も止み、たゞ中で人々のする話聲だけが幽かに聞えてゐました。人魚はもう一度皇子の顏が見たく、どうかして船室を覗かうとしてまた船へ近づきましたが、この時船は先刻よりもずつと迅い速力で進みだし、それに波が高くなつたので容易に近よることが出來ませんでした。それでも一生懸命になつて跡を追つてゆくうち、遠い空で稻光りがすると、いつか天候がものすごく變つて來ました。今まで平だつた波は次第に高くなり、風がはげしく吹きだし、海上はやがて

恐ろしい大暴雨になりました。皇子の乗つてゐる船は山のやうな大波の間を葦の葉のやうに揉まれ揉まれて進んでゐましたが、そのうちに激しい響をたてゝマストが二つに折れ、舷の板がメリ〳〵とうち碎けると、水夫たちが一聲に助けを呼ぶもの凄い遠吠のやうな叫びと共に斜めに仆れて水の中へ沈んでしまひました。

『アッ』と、叫ぶ暇もなくこれを眺めてゐた人魚は、しばらくは暗のなかに茫然としてゐましたが、ふと吾に返ると、折々閃めく稻妻の光をたよりに一心に皇子の行衛を探しはじめました。いろ〳〵な船の道具や木片などが一面に浮いてゐる水の中を、あちらこちらと泳ぎまはつてゐるうちに、運よくも、もはや泳ぎ疲れて死んだやうになつて漂つてゐる皇子の姿を見つけました。早速に抱きあげてみますと皇子の美しい兩眼はかたく閉ぢて、手足はぐたりとして何の力もありませんでした。

もし人魚が助けに來なかつたら、皇子の命はもう少しで絶切れてしまふところでした。

皇子を抱いた人魚は、何處をあてともなく泳いで泳いで泳ぎぬきました。さうして夜の白むころやつと陸地につきました。

そこは美しい緑の森が落ちかくまつてゐた真白な砂濱で、森のなかにはお寺のやうな建物が見えてゐました。

人魚は皇子をそつと渚におろし、自分は水のなかに匿れて、案じながらそつと様子を窺つてゐました。

この時、森のなかのその白く見えてゐる家の中から鐘の音が聽えて、五六人の娘たちがどや〳〵と出て來ました。

そのうちのいちばん美しい娘が何の氣なしに渚の方へ歩いて來てそこに横たはつてゐる皇子を見ると、ひどく驚いた風をして、大急ぎで人々を呼びに行きました。

人魚は人々が大騒ぎで介抱したあげく、やう〳〵皇子が氣がつき、あたりの人の顏を見まはして、につこり笑つたまでを隱れながら見屆けました。

けれども皇子は自分の方を向いては笑つてくれず、また自分に命を救はれたこともちつとも知つてゐない様子なので、人魚はたまらず悲しい氣もちになりました。

そのうち、皇子はみんなに擔はれて、その白い家の中へ入つてしまつたので、人魚は悄然として、海の底の父親の城へと歸つてきました。

（前篇終り）

高飛競爭

おか冬き一

一

ある時、蚤と、蟋蟀と、蛙とが高跳の競爭に、世界中の者を、招待しました。

『一番、高く跳んだ者には、姫をやらう』と王樣が申されましたので、大變な評判になりました。

『無論 お姫樣は俺の物だ、俺はそのねうちがあるんだ』と、てん〴〵に、思つて居ました。

二

先づ第一番に蚤が、えらい勢で跳び上りましたが、見物人たちには、目にも止まらなかつたので、

『蚤はちつとも、跳び上らなかつたんだ』

『きつと、さうにちがひない』

『たしかにさうだ』

『卑怯な奴だ』と、とうとう跳ばなかつた事に、されて了ひました。

三

二番目は、蟋蟀の番です、蟋蟀は、うかつに跳び上がつたら損だぞと、考へました。

そして、少しばかり跳び上がつたかと思ふと、王様のお顔の眞中へ、ちよこんと、とまりました。

『無禮者め……』

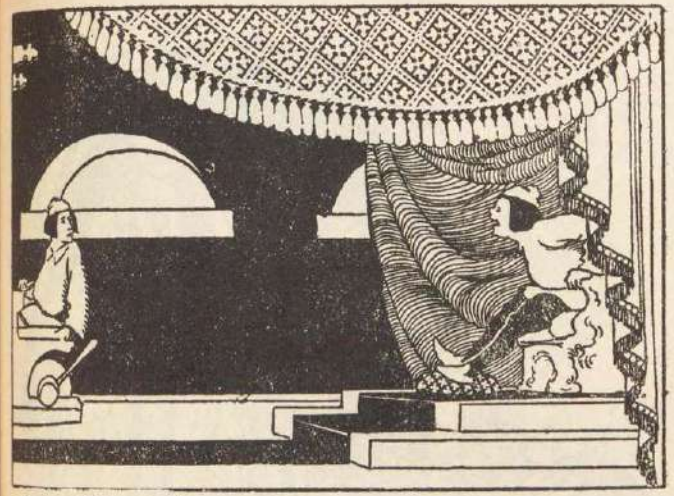
と、王様は、蟋蟀の無作法にすつかり腹をお立てになりました。

四

三番目は蛙の番で、蛙はぴよんと、横跳びに、お姫様のお膝の上に跳び上りました。お姫様は蛙のものになりました。

『一等高く跳び上つたのは、俺なんだ、この世の中ちや怠け者が一番もてるんだ、とても馬鹿らしい』と蚤が言ひました。

『この世の中ちや怠け者が一等もてるんだ、とても馬鹿らしい』と蟋蟀も言ひました。（をはり）



はだかの王様

（一幕二場）

長田秀雄

第一場

國王陛下御用裁縫師の機織場。上手には玉座がある。正面人間の眼のやうな感の大きな窓。下手には、少しこの室には、不釣合なくらゐ大きな機織臺が二臺据えてある。

詐欺師の機織甲、（玉座に腰かけて）おい、兄弟。いよ〳〵今日は國王陛下がお出になると云ふ話だぜ。

詐欺師の機織乙、（機織臺に腰かけてゐる。）今日うまく王様を欺してしまへば、もう締めたもんだな。

詐欺師の甲、（突然笑ふ。）はゝゝゝ

詐欺師の乙、あゝ、吃驚した。兄弟。何がそんなに可笑しいんだ。

詐欺師の甲、何が可笑しいつて、お前、考へてみろやい。何から何まで可笑しい事づくめぢやないか。始めて、この國へ來て國王陛下に御眼にかゝつたとき、お前が『陛下、私どもは機織で御座います。私どもの織りますものは、何とも云へない見事な織物で御座いまして、色合と云ひ柄と云ひ、實に美くしいばかりでなく、その上に、世にも不思議な力を持つて居ります。即ち、自分不想應な役についてゐる役人たちや、心の愚かな者どもには、この織物は決して眼に見えませぬ。從つて、この織物の美くしさを知る事の出來るのは賢い人たちより他には御座りませぬ。』と、申上げたではないか。俺はあの時、もうあぶなく吹出す筈だつた。

詐欺師の乙、はゝゝゝ、でも、王様も餘程、お目出度いぢやないか。俺の出鱈目をきくと、すぐ、『では早速織つてみろ。』とおつしやつて、莫大な手附の金を下すつたぜ。

詐欺師の甲、その手附を頂戴した結果はどうだい。（腰かけてゐる機織臺を指さして）その通り糸もなんにもかけてない機織臺を毎日バタンバタン動かしてゐるんだ。はゝゝ：

詐欺師の乙、あ、忘れてゐた。今日も金の糸を百匁と銀の糸を二百匁買はせるんだつた。

詐欺師の甲、あゝ、後でもいゝやな。どうせ織物に費ふんぢやなし。俺たちの行李の底にしまつとくんだから……

詐欺師の乙、さうだ。もし、王様がいらつしやるといけねえ。少しバタンバタンやらうかな。

（機を織り出す。）

沈　默。

詐欺師の甲、なあ、兄弟。王様もお目出度いが、この間、王様の命令で、どの位織れたか見に

來た大臣があつたなあ。

詐欺師の乙、うむ。あの鹿爪らしい顏をした爺か。

詐欺師の甲、俺やあいつの顏を思出すと、腹の皮がよれるやうだ。はゝゝゝ、何しろ、此處へ入つてきて、この空の機織臺をみると、あいつめ、ぎくりとしやがつて、急に眼ばたきを二三遍やつたなあ、見物だつたなあ。

詐欺師の乙、あの時のあいつの顏にや、何の事はない。俺は馬鹿で、おまけに身分不相應の役をつとめてゐると書いてあつたやうなもんだせ。

詐欺師の甲、併し、うまく賞めやがつたせ。この糸も何もかけてない梭を凝乎つと見て、『いや、これは見事ぢや。色合と云ひ、柄と云ひ、一點の非を打つ處もない。定めし國王陛下にも、お喜びであらう。』と拔かしやがつた。

詐欺師の乙、だが王樣は本統に來るのかな。來るなら早く來て貰ひたい。俺やもう手がだるくなつた。（欠伸をする。）

詐欺師の甲は默つて、人間の眼のやうな感の大きな窓の處に行き、外方を眺める。

詐欺師の甲、だが、兄弟。

詐欺師の乙、何だ。

詐欺師の甲、今日は餘程うまくやらなきや、ならないな。もし、王樣が御覽になつたとき、俺は馬鹿なのかしら。身分不相應の役についてゐるのかしらと、かう思つて下さりやいゝが、反對に、

詐欺師の甲、だが、兄弟。王樣なんて者は、我々見たやうに、苦しい眼には會ひつけて居ないから、自分の價値を疑つたりしやしまいと俺や思ふせ。

詐欺師の乙、自分の價値を疑はないのは、ずば拔けた偉い人か、ずば拔けた馬鹿だけだ。俺たちが、始めて王樣に御眼にかゝつた時、王樣は、『では早速織つてみろ。』つて、おつしやつたぢやないか。あれを見ても、王樣はどの位の方だか。分るぢやないか。

詐欺師の甲、ありや御家來たちの中に、馬鹿は居ないか、身分不相應な役についてゐる者は居ないか、知りたいとお思ひなすつたんだ。

詐欺師の乙、それがもう自分の價値を疑ぐつてゐらつしやる證據ぢやないか。

詐欺師の甲、どうして。

俺は國王だ。國中で一番偉い人間だ。その俺に見えないのだから、これは詐欺だと思はれたら大變だせ。それこそどんな御仕置にあふか知れたもんぢやない。

詐欺師の乙、大丈夫だ。王樣はそんなずば拔けた方ぢやない。國中で一番賢いと云はれるあの年を取つた大臣でさへ、あの通りぢやないか。大抵の人間は、始終自分の價値を疑つてゐる者だ。

詐欺師の乙、ずば抜けた馬鹿か偉い方なら、御家來の價値を疑ぐつたりする筈がないぢやないか。（笑ひながら）お前、どうかしてゐるぜ。どうだい。この機にかゝつてゐる立派な織物が見えるかい。

詐欺師の甲、はゝゝゝ馬鹿にしちやいけない。（かう云つて、窓の外をみる。）や、王樣がいらしつたぜ。みろ、往來の人たちが、皆地面の上に坐つて、お辭儀をしてゐる。

詐欺師の乙、兄弟。俺や、かうして一生懸命に機を織る振をしてゐるから、お前、そこいらをよく片付けて、お出迎をしてくれ。

詐欺師の甲、よしきた。

詐欺師の甲は、そこらを片付けて、去る乙は一心に梭を動かしてゐる。甲が恭やしく王樣と大臣とを案内してくる。

詐欺師の甲、國王陛下には、相變らず美はしい尊顏を拜し奉りまして、恐悦至極に存じまする。

王樣、（にこやかに）そちたちも達者で結構ぢや。

詐欺師二人、有難い仕合せで御座ります。

王樣、ときに今日參つたのは、他ではない。先日大臣を見分のため差つかはしたが、歸つて申すには、色合と云ひ柄と云ひ、まことこの世に比類のないやうな美くしい織物であると申すゆゑ、俺もつい見たうなつて、やつて來たのぢや。

詐欺師の甲、恐れ入りまして御座りまする。取るにもたらぬ私どもの仕事を、かくまで御氣にかけられ、尊い御身を以つて、このやうな汚くるしい機織場へ御出で下さいましたは、私どもに取りまして、何ともたとへようのない名譽で御座りまする。（機織臺を指さす）御覽のとほり、兩人日夜一生懸命に苦心いたして、織つて居りまするが、何分にも、糸の工合、梭の動かしやうなど、非常にむずかしう御座りまするゆゑ、實は只今も兩人で、默々息いたして居りましたやうな次第で御座りまする。

王樣、（突の機織臺を見て、ギヨツとする。）ふむ。（後についてゐる大臣の方を振返つてみる。）成程。

大臣、（深く頭を下げて）國王陛下。御覽遊ばしませ。何と云ふ珍らしい織物で御座りませう。日の光を受けて、輝やくこの色合の美しさは、如何なる寶

石も及びませぬ。また、この柄の面白さは、たとひ國中の畫工を集めましても、思ひもつかぬで御座りませう。成程、このやうな美くしさは、心愚な者どもや、身分不相應な役についてゐる役人どもには分らぬ筈で御座りまする。

詐欺師二人平身低頭する。

王樣、（急ににこやかに）うむ、そちはさすが國中で一番の賢い男ぢや。大臣の位を恥かしめぬ者ぢや。これ、機織。そちたちはまことに尊い技術を覽えた物ぢや。この功績に報ゆるためには、俺はどのやうな物でも惜しいとは思はぬ。何なりとも望むがよい。

詐欺師二人、はつ、恐れ入りまして御座りまする。然らば國王陛下に御願いたしまする。私どもは御覽のとほり貧しい者で御座りまする。それに、故郷には年を取つた母が御座ります。どうぞ、私どもが御用をすましまして、歸國いたしました後、一生安樂に暮らせるだけのお金をお惠み下さいまし。

王樣、よろしい。ではその方たちに、この衣裳が出來上ると一緒に一萬圓宛の金をやらう。

詐欺師二人、有難う御座りまする。

王樣、これ兩人。この衣裳は何時までに出來上るのぢや。

詐欺師の乙、さればで御座りまする。私どもが、かうして日夜苦心をこらしまするが、何と申しましても、非常に織方がむづかしう御座りまするゆゑ、はか取りませぬが、御覽のとほり、もう大分織上げました事ゆゑ、あと四日も御座りますれば、織上る事と存じまする。

王樣、あと四日と申すか。

詐欺師の甲、左樣で御座りまする。織上りましたらば、早速私が裁縫にかゝりまするゆゑ、まづ、一月も經ちましたならば、御召しになる事が出來るかと存じまする。

王樣、ふむ。一月と申すと、あと二十日ぢやな。

詐欺師二人、左樣で御座りまする。

王樣、幸、來月の末には、この國の王の先祖を祭る大祭禮がある。その時の行列には、俺はこの衣服を身にまとうて出る事が出來るな。

大臣も詐欺師二人も無言で頭を低げる。國王陛下は玉座から立上る。

王樣、これ、兩人。

詐欺師二人、はッ。

王樣、なほ、この上とも精を出して、なるべく早く仕上げてくれい。俺はその衣裳が早く着てみたうてならぬのぢや。

國王陛下は靜かに大臣を伴につれて退場。詐欺師二人平伏して見送る。

第二場

都の大通り。兩側には、高い立派な家が並んでゐる。その家の窓と云ふ窓、露臺などには、美くしい毛氈をかけ並べてある。その他花をかざつたア、チだの、大きな美くしい旗だのがかざられてゐる。路の兩側には、澤山の市民たちが、蹲まつたり、立つたりして王樣の大行列のお通りを待つてゐる。何處からともなく音樂の音が流れてくる。

市民一、（老人）どうなすつたんだらう。王樣は、まだいらつしやらない。

市民二、遠くから、音樂の音がきこえてくるぢやないか、あの音樂は大行列の先頭だ。

市民三　此處へいらしつたら皆で萬歳をとなへようぢやないか。

市民一二三、（一緒に）贊成々々。

女一、今度の王樣のお召は、大そう立派な物ださうですね。

女二、何でも外國から來た偉い裁縫師が一生懸命に仕上げた物ださうで御座いますよ。

女三、（女一。に）お宅の旦那さまは侍從武官でいらつしやいましたね。

女一、えゝ、左樣で御座います。何でも先日そのお召が出來上りましたとき、宅は王樣がそれをお召し遊ばしたところを拜見したとか申して居りましたよ。

女二、まあ、お宅はお仕合せで御座いますねえ。

誰よりも先きに、そんな立派なお召を御覽になるなんて。

女三、私たちは、もうお召物の事と申しますと、人樣のでも自分のでも、すぐ胸がわくゝ致して參ります。

女四、（先刻よりこの話を凝乎つときいてゐる。）失禮で御座いますが、今度の王樣のお召は、どんな柄で御座います。

女三、まあそれよりか、色合は何んなで御座りますの。

女二、皆さま、私は何と云ふ織物だか、それが一番伺ひたいと存じますよ。

女一、ところが皆樣、どうしたのですか、宅は歸つて參りまして、その話をいたしますから、私は早速、丁度只今の皆さまのやうに疊みかけて、柄や色合をきゝましたの。さうしますと、あなた、急に恐い顏をしましてね、五月蠅い。何だつてさう王樣の召物の事をきゝたがるんだ。お前は、俺が馬鹿だと思つてるんだな。それでなきや、身分不相應な役についてゞもゐると思つてるのかと申しますよ。私は呆れて口がきけませんでしたよ。

女二、三、四、の三人はまあと驚いた表情で無言。

女五、（一人の子供をつれて、寡婦のやうな服裝をしてゐる。）ねえ、坊や。もう王樣がお通りになりさうな物だね。

子供、うん、僕早く王樣の衣服が見たくて仕樣がないんだよ。母さん。

市民一、これ〳〵、御婦人がた、侍從武官が怒つて奥さまを叱られた譯があなた方には分らぬかの。

女二、えゝ、分りませんわ。

市民一、お婦人がたはまだ御存じないと見える。それはかうぢや。今度外國の裁縫師が仕上げた王樣のお召は、不思議な布地で、それはそれは美くしい物ではあるが、心の愚かな人たち

ちや、身分不相應な役についてゐる人たちには、見えもせず、持つても手にふれぬと云ふ事ぢや。侍從武官は、奥さまがあまり立續けに柄や色合をおきゝなされたので、果してそのお召物が侍從武官に見えたかどうか奥さまが疑うて居られると思はれたのぢや。

女一、 成程、それでよく分りました。そりや皆樣の前ですが、宅に、そのお召物が見えない筈は御座いません。きつと見えましたとも。

女三、 どうして、また王樣は、あんなにお召物がお好きなので御座いませう。

女二、 人樣の御話では、王樣は一日に何度となく御召替を遊ばすさうで御座いますが……

女四、 ですから、御殿の内では、衣裳の間が一番立派ださうぢやありませんか。

市民二、 我々にも王樣のお心持は分らないのですが、兎に角、この國では、實際の政治よりも、よい衣裳を着て、大行列で練つて歩く事の方が重んぜられてゐますね。

女一、 王樣がこれまで御造りになつたお召物だけでは、御滿足が出來ないで、そんな不思議なお召をお造りになつたと云ふのは、何う云ふ譯で御座いませう。

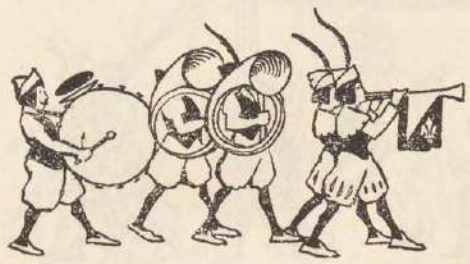
市民四、 それについて、私はかう云ふ考を持つて居ります。皆樣、少時御聞き下さい。（演說口調にて）そもゝ、王樣は政治の第一要件として、まづ國王たる者は、第一に人民に立派な威嚴のある態度でのぞまなければならぬ。一國は他國にやはり威嚴を以つて、のぞまなければならぬと思はれたのであります。その御考へが段々進んできた結果として、御覽のとほり都を立派にし始終大行列を催し、またその上に立派な衣裳を着る事を好まれるやうになつたのであります。

子供、 母さん。まだ王樣の行列は來ないの。

女五、 小父さんのお話の邪魔になるといけないから、默つていらつしやい。

子供、 だつて、僕早く王樣の衣服が見たいんだもの。

市民四、 そこへ外國から、立派な裁縫師が參りました。王樣は、その不思議な衣裳の話をきかれまして、これまでの衣裳の平凡なのに倦いて居られた結果、喜んで御註文になつたのです。これを以つて、人民たちに威嚴を示したら、さぞよく國が治まるだらうと思はれたのであります。無論一方では



心愚かな者どもや、身分不相應な役についてゐる人たちを見破るのも、必要な事だと思はれはれたのであります。

女五、 では、もう大分御家來たちの内の、心の愚かな人や、身分不相應な役ほついてゐる人が分つたで御座いませうね。

市民四、 私はまだその點については、殘念ながら、よくきゝませんでした。たゞ、御家來たちの内で、苟しくも、王樣のお召物を拜見した人たちは、皆こぞつて、その美くしさをほめたたへてゐると云ふ事で御座ります。

子供、（突然）お母さん。王樣の行列が來たよ。音樂の音近くなる。市民たちも女たちもさわぎ出す。少時して、先頭に樂隊、次に槍を持つた家來二人、それから大臣、その次に、立派な天蓋を四人の家來がさゝげて歩いてゆく。その天蓋の下に、はだかの王樣が、美くしい王冠をかぶつて笏を持つて、得意さうな顏付で、靜靜と歩いてゆく。その後には兵隊の列が、歩調を取つてつゞいて行く。

市民たちも、女たちも、おやと云つたやうな不思議な顔付をする。それから、ギクリとして、周圍を見廻す。そして、行列を見送る。

王様の行列が通つてしまふと、

子供、（突然）母さん。どれが王様なの。

女五、ほれ、あの天蓋の下を立派なお召物で歩いていらつしやつたでせう。あれが王様です。

子供、あのはだかの人。

女五、はだかではありません。そんな事を云ふと、お前の馬鹿が皆様に知れますよ。

子供、だつて、何も着てゐやしないぢやないの。

母さん。

市民一、子供と云ふ者は、罪のない事を云ふものぢや。はゝゝゝ

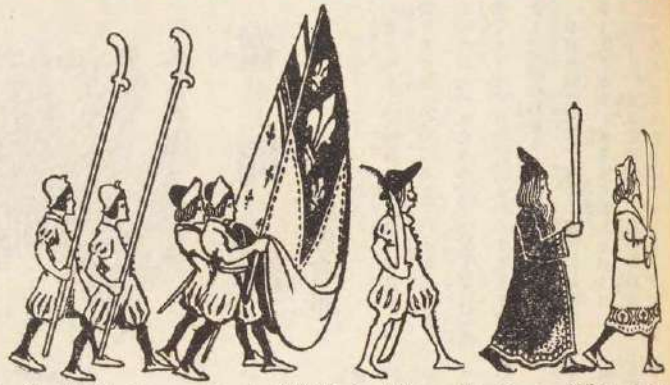
皆々、またギクリとする。少時して、皆苦笑ひをする。

子供、ねえ、母さん。どうしてあれが王様の一番いゝ衣服なの——教へて頂戴よ。ねえ、母さん。

幕

附記

どうぞ皆さん。この芝居をやつて見て下さい。お識りになつたゝけでは、大そうむづかしいとお思ひでせうが、何處か廣い場所さへあれば、存外やさしく出來るのです。



まづ、第一場の方では、これが少し困難ですが、何處かゝら、機織の器械を一つ借りてくるのです。室内の工合は全部、白い大きな藁紙の幕を正面に張つて、それに皆さんで、繪具を使つて、窓だの何かお書きになれば、それでよいのです。玉座は少し風の變つた椅子や卓子です。衣裳は皆さんお宅にある物で工風して下さればいゝのです。帽子、王様の冠、劍なぞもさうです。

第二場は、衣裳はやはりお宅の物で間に合せるとして、王様だけは、はだかです。市民の一は白髪の長い髭をつけて下さい。それから女たちは、お母さんの割烹着でも間に合ひます。

市街の光景はやはり正面に白い藁紙の幕を張つて、それに西洋風の人家の並んでゐる工合を描くのです。その他、王様や家來の持物は、皆さん智惠をしぼつて工風して御覽なさい。それもまた面白いものです。終りに天蓋は、傘の上に四方に長く垂れるやうに紙を張つて、それに繪具で美くしい模樣をつけるのです。それで結構です。

道具の考へがついたら、すぐ稽古をして下さい。稽古は始めは役割をきめて、お互に自分のせりふをなるべく自然な調子で讀み合ふのです。それが出來るやうになつたら今度は立つて、本統に芝居をやるつもりで、何遍も何遍も、くりかへすのです。そして、充分に熟してから、本統に、衣裳をつけて、背景の前で、見物の人たちに、見て貰つてやるのです。夜はあかりの都合が面倒ですから、なるべく晝の方がよいと思ひます。

何んな舞臺でも、本統の舞臺が使へれば、なほ結構です。もし、人數が揃はなければ、一人で二つの役を持つやうにしてもよいのです。

雀から聞いた話

齋藤佐次郎

雷雨のあとで蕎麥の畑を通つて見ると、時々まつ黑になつてゐます。丁度火で燃えたやうになつてゐるのです。田舍の人は『稻妻でさうなつたのだ。』といつてゐます。しかし、いつの時からさうなつたのでせうか。

私はそれに就て、雀から面白いお話をきましたから、皆さんに話しませう。

しかし、雀はその話を、蕎麥の畑の近くに今でも立つてゐる年とつた柳の木から聞いたのださうです。

×

どこの畑でも作物が實つてゐました。裸麥や大麥や、それから一番上等の燕麥までが、小枝にとまつた黃いカナリヤのやうな形狀をして實つてゐました。燕麥はニコニコ笑つて立つてゐました。穗の房々したもの程、謙遜して頭を低く垂れてゐました。

そこには、蕎麥の畑がありました。この畑は、年とつた柳の木の丁度眞向になつてゐました。蕎麥は、外の作物のやうに頭を下げないで、大威張りで、眞直つて突立つてゐました。

『己はどんな作物の穗にも負けない位ふさふさしてゐるぞ。』と蕎麥がいひました。『その上、己は外のものよりすつと綺麗なのだ。だから自分で自分の姿を眺めると、實にいい氣持ちがする。……もし〳〵、年とつた柳の木のお爺さん。お前さん、われ〳〵より立派なものを見た事があるかね。』

かういつてきくと、柳の木は頭をコツクリ〳〵して、『さうだ、お前さんが一番立派だよ。』と、いつてゐる樣でした。

そこで蕎麥は、空威張りして、いよ〳〵身體をひろげながら、

『柳のお爺さん、、、、、、もうろくしちやいけないぜ。身體には草が生える位年とつてゐるぢやないか。』と、いひました。

さういつてゐる間に、大嵐がやつて來ました。野に生えてゐる花といふ花は、葉をたゝんで嵐が通り過ぎる間中、小さな頭を垂れてゐました。ところが、蕎麥だけは大威張りで突立つてゐました。

『おれたちのやうに頭をお下げなさい。』

と、花たちがいひましたが、

『己には、少しもさうする必要がない。』と、蕎麥はいつてゐました。

『わし等がするやうに頭を下げなよ。』と、外の作物が叫びました。『今嵐が襲つて來てるぢやないか。嵐は天から地までとゞく位な翼を持つてゐるんだぜ。お前が助けてくれといふ間に眞二つにされて了ふよ。』

『でも、己は頭を下げる必要がない。』と、蕎麥がまたいひました。

『花を閉ぢて、葉を垂れなさい。』と、今度は年よりの柳の木がいひました。『雲が裂けた時稻妻を見てはいけないよ。人間でさへそんな事をしないよ。稻妻が光つた時、天を覗きこむと、人間でさへ眼が廻つて了ふのだ。まして、人間より價値の少いわれわれがそんな事をしてご覽、それこそ、どんな事になるか解りはしないよ。』

『人間より價値がないんだつて。』と蕎麥が大聲を出しました。『己は天をまともに見てやるぞ。』蕎麥は大威張りで、その通りやりました。すると、その時丁度、全世界が一度に燃え出したやうになりました。稻妻はそんなにも光が强かつたのです。

やがて、大嵐が通り過ぎると、花や作物は、雨にあたつて生き生きとして、靜かなすが〳〵しい空氣の中に立上りました。しかし、蕎麥だけは稻妻のために炭のやうに黑焦になつて、野の上に、枯れた雜草のやうになつてゐました。

年とつた柳の木は、風にふかれて枝を波打たせてゐましたが、大きな雨滴が、丁度涙のやうに緣の葉から落ちました。

その時、雀がきゝました。

『柳のお爺さん、なぜ泣んです。何もかも、いゝ氣持ちでありませんか。お日樣が輝いてゐるのを御覽なさい。雲の走つてゐるのを御覽なさい。お爺さんには、花や藪の薫がしないんですか。』

柳の木は泣き乍ら、蕎麥の空威張りと、それから受けた嵐の話をしました。

この話を皆さんにしてゐる私は、雀からその話をきいたのです。ある夕方、雀たちに何か話をしておくれといつた時、この話をしてくれました。（をはり）

燒パンを踏んだ娘

吉田絃二郎

×

インゲルは貧しい家の娘でしたが、たいそう高慢ちきな娘でした。それに、ひとつ惡い癖がありました。蠅をつかまへては羽根をむしり取つて、蠅を地に這はせるのでした。黄金蟲や甲蟲を採つては針をつきさして、青い木の葉や、小ひさな紙片を蟲の足にくゝりつけました。蟲は苦しがつて針を拔きとらうと蹣いて、木の葉や紙片を引つくらかへすのでした。

『御覽、黄金蟲が本を讀んでる、あんなに本のページをめくつてる。』

とインゲルは申しました。

インゲルは大きくなるにつれてだん〳〵惡くなつてまゐりました。

しかし、顏だけはだん〳〵美しくなつて行くのでした。

『お前はいまに、きつとひどい目に逢はされるにちがひない。お前は小供のころは、よく私のエープロンをお踏みだつたよ。いまにお前は、私の心臟でも踏むやうになるにちがひない。』とインゲルのおッ母さんは申しました。

ほんたうにおッ母さんの言葉が事實になつてまゐりました。

×

インゲルは大きくなつてから、ある貴族のお邸へ奉公にまゐりました。インゲルは綺麗な小供でしたから、やさしい主人たちはインゲルを、自分等の小供のやうに大切にして、自分の小供とおんなじ美しい着物を着せてやりました。美しい着物は、大そうよく似合ひました。ですから、インゲルは一層高慢ちきになりました。

インゲルが、御奉公にあがつてから、一年たちました。親切な主人は、ある時、インゲルに申しました。

『インゲルや、お前はちよつと、家へかへつて、久しぶりで、お父さんや、お母さんに逢つておいで。』

インゲルは自分の家にかへつてまゐりました。しかし、それは、お父さんや、おッ母さんに逢ひたいためではありませんでした。自分がどんなに立派になつたかを、みんなに見せつけてやりたいと思つたからでありました。

インゲルは、町の入口の門のところまで、やつてまゐりました。門の傍には、井戸がありました。井戸のそばには娘たちや、若い男たちが、おしやべりをして居りました。すぐその傍の石にはインゲルのおッ母さんが腰をかけて居りました。おッ母さんは、森で拾ひあつめた焚木をひと抱へだいてゐました。おッ母さんを見たばかりでインゲルは逃げて行つてしまひました。インゲルは焚木を

拾つたり、ぼろ〳〵の着物を着てゐるおッ母さんに愛想がつきたのでした。

それからまた半年過ぎました。

『インゲルや、お前は家へかへつて年をとつたお父さんやお母さんに逢つておいで。』と奥さまが申しました。『小麦製の大きな燒きパンを上げるから、お土産にもつておいで、お前に逢つたら、どんなにみんながよろこぶか知れない。』

インゲルは一番いゝ着物を着て、新らしい靴をはいて、裾を上げて足を汚さないやうに、注意に注意して、道をあるいてまゐりました。

途中にぬかるみの道がありました。かなり長いあひだ水が一面に道の上にたまつてゐました。インゲルは立ち止まつて何うしたら宜いだらうと考へました。とう〳〵インゲルは自分の靴を汚さないために、お土産にもつて來た燒きパンをぬかるみの中に投げこみました。そしてインゲルは燒きパンを踏み石の代りにして、ぬかるみを飛びこえるつもりでした。

インゲルは燒きパンの上に立つて片方の足をあげようとしました。すると不思議なことには、燒きパンがず〳〵と深く深くぬかるみの底へ沈んで行くのでした。おしまひにはインゲルはぬかるみの中へ埋まつてしまつて、かげも形も見えなくなりました。

今までぬかるみだと思つてゐたところは黒い水の泡が浮いた沼になつてしまひました。

いつたいインゲルは、何處に行つたのでせう？

×

インゲルは沼の底へ沈んで沼の妖婆のところへまゐりました。沼の妖婆はその時酒をこしらへてゐました。沼の妖婆が戻になると、酒をこしらへ

るので、いつも牧場から湯氣がたちますのをみなさんは知つておいでになりますか。

恰度インゲルが落ちて行つたのは、沼の妖婆の酒造り場だつたのです。そこはたいへんきたないところですから、たれでも我慢をしてながく立つてゐることは出來ません。

沼の妖婆の酒造り場にくらべると下水溜なんかほんたうに美しいお座敷のやうなものです。ひとつ〳〵の酒樽からは、ちよつと嗅いだゝけでも目がまはりさうないやな匂ひがただようてゐます。また酒樽と酒樽とのあひだのすきから逃げ出さうとでもしますと、そこには蟾蜍や蛇がたかつて居ります。

インゲルはこんな恐ろしいところに落ちて行つ

たのです。そこは氷のやうに冷たくつて、手も足もちぢきに凍へてしまひました。インゲルはしつかり燒きバンにしがみついてゐました。

沼の妖婆の傍には沼の魔神のお祖母さんが坐つてゐました。沼の魔神のお祖母さんはほんたうに毒々しい顏をしてゐました。沼の魔神のお祖母さんはいつも針仕事をしてゐました。沼の魔神のお祖母さんは人間の不幸や禍をよびおこすやうに呪文をとなへては靴下だの、いろ〳〵の不思議な物を縫つたり編んだりしてゐました。

沼の魔神のお祖母さんは眼鏡を眼にあて〻じろじろとインゲルを見ました。そして申ました。『この娘はなか〳〵美い子だ。わたしはこの子供を紀念物にしてやらう。この娘はわたしの孫の家に連れて行つて、孫の部屋の立派な型像にして飾つてやらう。』とう〳〵沼の魔神のお祖母さんはインゲルを地獄につれて行つてしまひました。

そこはいくらあるいてもあるいても限りのないやうな廣い廣い部屋でした。前を見ても後をふり返つて見ても、目がまはりさうに廣い部屋でした。あたりには幽靈のやうなひよろ〳〵した人たちが、地獄の戸があくのを待つて居りました。大きな肥つた蜘蛛が何千年のあひだも、亡者たちの足の上に蜘蛛の巣をかけてゐました。その蜘蛛の巣が銅の鎖のやうに亡者たちをく〻りつけてゐました。おまけにどの亡者たちも恐ろしい心配にふるへて居りました。インゲルは『もし彫刻のやうにぢつとして、ひとつ處に立つてゐなければならないのだつたら、どんなにしようか。』と、心配しました。インゲルは、自分が燒きバンのやうなものになつて行くやうな氣がしてなりませんでした。沼の底の魔たちは眼をおそやかして、惡だくみ

ルの着物も例もすつかりぼろ〳〵になつてゐました。着物はまるで粘土でぬり立てられたやうになつてゐました。一匹の蛇が髮の中から脊中の方へ垂れさがつてゐました。着物のひだといふひだからは、蟾蜍が鳴いてゐました。

『だれだつて、こんな處に下りてくれれば、こんなになるのは、當り前だわ！』と云つてインゲルは自分で自分を慰めてゐました。

×

だん〳〵ひもじくなつて來たのにはさすがのインゲルも一番困らされました。インゲルが踏まへを考へながら、インゲルをぢつと見つめてゐました。

『屹度あたしを見るのがあの人たちには嬉しいんだわ！　あたしの顏が綺麗で、あたしの着物が立派なんだから！』と、インゲルはうぬぼれてゐました。

インゲルは振り向いて見ました。まあどうでせう、沼の妖婆の酒造り場にゐるあひだに、インゲ

てゐる燒きパンをこゞんで、そつと喰べればいゝのですが、インゲルの脊中も腕も手も、まるで石の丸柱のやうに堅く、こはゞつてしまつたのでした。インゲルは眼だけをぐる〳〵とまはして、後や横を見るだけでした。やがて澤山の蠅がやつて來ました。蠅は前後からインゲルの眼の中に這ひ込みました。インゲルはまたゝきをして、蠅を追ひましたが、蠅はちつとも逃げませんでした。それはその筈です。蠅は逃げることが出來なかつたのです。なぜかといへば蠅はみんな羽根を引つこ拔かれてゐたからなんです。ひもじいのと、蠅に責められるので、インゲルはたまらなく苦しみました。

『いつまでつゞくんだらう、こんな苦しいことが。あたし、とても、やり切れない！』とインゲルはひとりごとを申しました。

インゲルはいつまでも、その苦しさをこらへて行かなければなりませんでした。

間もなくインゲルの頭の上から熱い涙がひとつぽたりと落ちてまゐりました。その涙はインゲルの顏から胸にはいつて、燒きパンまで落ちてまゐりました。やがてまた一つの涙がぽたりと落ちて來ました。やがてまた、いくつも〳〵の涙がぽたり、ぽたりと落ちて來ました。

一體たれがインゲルのために泣いてくれてゐるのでせうか。それは地の上の世界のおッ母さんの涙でした。

インゲルの耳にも地の上の世界のいろ〳〵の人人の聲が聞えてまゐりました。おッ母さんは泣いて語つてゐました。『高慢ちきだからそんな目に逢つたんだ。ほんたうにお前はおッ母さんを泣かせるんだよ！』

地の上の世界のおッ母さんも、たれでも、インゲルが燒きパンを踏んで、沼の底の世界に沈んで行つたことを知つてゐました。それは山の上にゐた一人の牛飼がそれを見てゐて、みんなに話してきかせたからでした。

おッ母さんが申しました。『なんてまあ、お前はおッ母さんに悲しい思ひをさせるんだよ！きつとわたしは、こんなことになるだらうと、かねがねから心配してゐたんだが！』

その聲を聽いてゐたインゲルが考へました。『あたしは生まれなかつた方がよかつた。だけどどうしたらいいだらう、おッ母さんはあんなに泣いていらつしやる。』

間もなくまた他の聲が地の上の世界から聞えてまゐりました。それは兩親のやうな親切でやさしかつた御主人や奧さまの聲でありました。

『あの子は、ほんたうにひどい子でした。神さまの賜物を尊敬しないで、足で踏みつけるなんて、とてもいゝことはありはしない。』

地上の聲を聽いてゐたインゲルは却つて腹を立てました。そして『それならば最初からわたしがこんなことをしないやうに、みんなで止めてくれ

るのがあたりまへだのに！』と考へました。

やがてインゲルは村中の人々が地の上で歌をうたつてゐるのをきゝました。それは『高慢ちきな娘が靴を汚すまいと思つて燒きパンを踏んだ。』といふ歌でした。

インゲルは『惡いのはあたしだけではないわ。もつと〳〵たくさんの人が罰せられなければならないのに、あたしだけが、こんなに苦しんでゐる！ほんたうにつまらないわ！』

とインゲルは思ひました。インゲルの心はますます頑固になつてまゐりました。

『こんな地獄なんかに、人を落としたつて、こんないやなところでとてもいゝ人間になれるもんか。あたしはよい人間にならうなんて思ひはしないわ！　いつまでゝも意地張つてやる。』インゲルはよん〳〵云つて怒り出しました。

インゲルは地獄の底からぢつと耳をすまして、地の上の世界の人たちの話聲を聽いてゐました。地の上の世界の大人たちは子供たちに『インゲルのお話』をしてきかせました。地の上の世界の子供たちは『インゲルのお話』が終ると、いつでも『意地わるのインゲル』だの『いやなインゲル』だの『地獄で苦しめられるのはあたりまへだわ！』だのと申しました。

お話がすむたんびに子供たちはインゲルの惡口を申しました。

しかし、ある日いつものやうに、ひもじいのとくやしいので苦しんでゐますと、インゲルはふと自分の話がまた地上の世界で語られてゐるのを聽きました。お話をきいてゐた無邪氣な小娘は『インゲルのお話』が終つた時、急に泣き出しました。

『まあ可哀想に、インゲルは二度とこの世界にかへつて來ないのでせうか？』と小娘が泣きながらたづねました。

『とても、インゲルはかへつてこられないでせう。』と大人が申しました。

『だけど、もしインゲルが決して二度とそんな惡い事をしないと、神さまにあやまつたら歸つて來られるでせうか！』と小娘が申しました。

『インゲルが、あやまつたりなんかするものか。そんな殊勝な娘ではないんだから、あの子は！』と大人たちが申しました。

『あたしはインゲルが、神さまにおわびをして、この世界にも一度、かへつて來ればいゝと思ふわ。もしインゲルがかへつて來たら、あたしは人形の家をインゲルに上げるは。ほんたうに可哀想なインゲル！』と悲しげに小娘が話しました。

この無邪氣な小娘の言葉はインゲルの心臟を貫くゝらゐ、つよくひゞきました。インゲルは地獄に落ちてからはじめて『可哀想なインゲル！』と

云ふ言葉を聽いたのでした。無邪氣な小娘が泣いてインゲルのために祈つてゐるのが地の底まで聽えました。その聲を聽いてゐると、インゲルはひとりでに泣き出したくなつてまゐりました。けれどもインゲルは泣くことが出來ませんでした。それがまた苦痛でなりませんでした。

×

地の上の世界では數年たちました。地の上の世界からは、このごろではあまり『インゲルのお話』をする聲は聞えて來なくなりました。ところが或る日インゲルは地の上の世界から悲しい聲が聞えて來るのに氣付きました。

『インゲル！　インゲル！　ほんたうにお前はわたしに悲しい思ひをさせたのねえ！　きつとこんなことになるにちがひないと、わたしが言つたことがあつたとらう！』といふ聲が聞えてまゐりました。それはインゲルのおッ母さんの聲でありました。

また或る時はインゲルはやさしい奥樣の聲をききました。それはほんたうにやさしい言葉でした。

『もいちどインゲルと逢へれば宜いんだが、何うも人間には何處へ行つたら逢へるんだか、ちつとも分らないから！』

地の下で聽いてゐたインゲルは、とても奥さまが地の底へたづねて來ることはできないといふことを知つてゐましたので、寂しい月日を送つてゐました。

それからまた幾十年といふ苦しい月日がたちました。

×

或る日インゲルは、誰かゞまた地の上の世界で、自分の名を呼んでゐるのに氣が付きました。

インゲルは不圖眼を上げて見ました。そこには ぴか〳〵と、美しい星のやうな二つの光が輝いてゐました。それはやさしいお婆さんの二つの眼でした。お婆さんといふのは『可哀想なインゲル！』と言つて昔、泣いて祈つてくれた無邪氣な小娘が、お婆さんになつたのでした。

お婆さんは今恰度天の神さまに召されて、死の國へ歸らうとしてゐるのでした。お婆さんはいよいよ地の上の世界へ『さよなら！』をしようとした時、子供のころのことを思ひ出したのでした。そしてあの『可哀想なインゲルのお話』を思ひ出したのでした。そして神さまにお祈りをしました。

『おう、神さま、わたくしはあのインゲルと同じやうに何の考へもなしに神さまの賜物を幾度も踏みつけました。また自分の心のうちに高慢ちきな事を考へて、人に話をしたこともありました。けれども神さまはおなさけをもつて、わたくしを地獄へ沈めなさいませんでした。どうぞ神さま、わたくしの最後の時までわたくしをお助け下さい！』

と、お祈りをすますと同時に、お婆さんの眼は閉ぢてしまひました。お婆さんは眼を閉ぢてしまひましたが、お婆さんは今度は魂の眼で、何んな遠い世界でも見ることができるやうになりました。

お婆さんは死ぬ時、一生懸命にインゲルのことを考へてゐましたので、死んで神さまの國に行つてから、お婆さんは、インゲルが住んでゐる恐ろしい地の下の世界を見ることができました。お婆さんは暗い地の底にくるしんでゐるインゲルを見て、子供のやうになつてさめ〴〵と泣きました。

やさしいお婆さんの涙とお祈りが、地の底の暗い世界へ餌となつて響いてまゐりました。その聲にインゲルの心は強く打たれました。そして地の

上の世界で、自分が行つたいろ〳〵な惡いことを思ひ出しました。インゲルは急に悲しくなりました。そしていまゝでに經驗したことのないほど、心の底からしみ〴〵と泣きました。

インゲルは、とても自分のやうな惡い人間には、神さまのお慈悲の門は開かれないだらうと思ひました。そしてまたしみ〴〵と泣きました。

しかし不思議なことには、インゲルが今までの高慢ちきな考へを捨てゝしまつて、『あたしはつまらない人間だ！』とはじめて謙遜な心になつてすすり上げて泣いてゐますと、明るい光が地の底の暗の世界へ、天上からさしてまゐりました。その光は雪達磨を溶かす春の太陽の光よりも、もつともつと明るい、輝かな光でありました。

その光がさして來ると同時に、いまゝでかちかちと氷りついてゐたインゲルの體は解のやうに滅えてしまひました。そしてインゲルは一羽の小鳥となつて、稻妻のやうにはやく、人間の世界へかけのぼつてまゐりました。

しかし小鳥は人間の世界に行つても、少しのお馴染もないので、恐ろしいやら、恥づかしいやらで、自分の姿を人に見られるのが辛さに、とうとう壞れかゝつてゐた百姓の家の壁のなかの暗い穴のなかにかくれてしまひました。

小鳥になつたインゲルは、その暗い穴のなかに坐つて顫へてゐました。その小鳥は聲を持ちませんでしたので、少も鳴くことができませんでした。

小鳥はながいこと暗い穴のなかに顫へてゐましたが、だいぶ時がたつてからはじめて、そこいらの明るい花やかな世界を見ることができました。

そこは何も彼も明るい世界でした。空氣は快く、彩はがでした。月は水のやうに澄んでゐました。木

も霧も薫つてゐました。何も彼もが愛と光のなかにつゝまれてゐました。

小鳥は何うかして唄ひ出して見たいと思ひました。が、何うしても唄ふ事ができませんでした。

五週間も六週間も小鳥は唄ひたい、唄ひたいと思つて小ひさな胸をいつぱいに波打たせました。

×

クリスマスの尊いお祭がまゐりました。親切な百姓は壁の直ぐ側に一本の柱を樹てゝ、柱の先に燕麥の穗をくゝりつけて、樂しいクリスマスの御馳走を小鳥たちにさゝげました。

クリスマスの朝の太陽が高くかゞやきました。

そして燕麥の穂をきら〳〵と照らしました。空の小鳥たちは、御馳走をたべるために柱のまはりを、うたひながらかけめぐりました。暗い穴のなかにかくれてゐた小鳥も、穴のなかゝらはじめて、『ぴい、ぴい』と鳴きました。そしてしまひには胸いつぱいに波を打たせて鳴きました。穴のなかの小鳥は、ほんたうにとう〳〵高い聲でうたふことができるやうになりました。穴のなかの小鳥の胸のうちにその時はじめてやさしい心が生まれて來ました。穴のなかの小鳥は、暗い穴を出て鳴きながら高く空をとんでまゐりました。

穴のなかの小鳥は何處に行つたのでせう？

寒い冬の日でした。湖の上は厚い氷でとざされてゐました。鳥も森の獸も食べるものがなくて飢えさうになつてゐました。

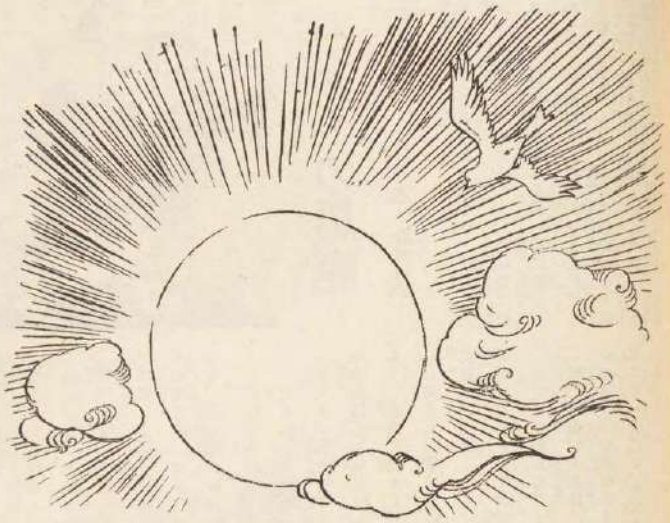
穴のなかの小鳥は遥い道の上を飛んで行きました。そして樅の通つた跡にあつちこつちに玉蜀黍の實を見出しました。また或るところではパンの屑を發見しました。

穴の小鳥は自分ではたゞ一粒の玉蜀黍か、パンの屑一つだけを食べて、飢えてゐる雀たちを呼び集めて、知らせてやりました。

穴の小鳥はさらに方々の町へ飛んでまゐりました。そして窓の外に撒いてあるパンの屑を見出しては、自分はほんの一とかけらだけ食べて、殘りのみんなを他の小鳥たちに分けてやりました。

×

その寒い冬の日を毎日々々穴の小鳥は、野から町、町から野と飛んで行つてはパンの屑を集めて、他の小鳥たちに分けてやりました。穴の小鳥が他の小鳥のために集めてやつたパンの量がだん〳〵増して、まゐりました。そして、なしまひには、昔イ



ンゲルが靴を汚すまいと思つて踏み臺にした、バンゲルの小鳥は一直線に幸福な太陽のなかへ飛び込んでまゐりました。（をはり）

ンとだん〳〵同じ位の量になつてまゐりました。

穴の小鳥が集めたパンの屑がインゲルが踏み臺にしたパンとまつたく同じ量になつた時でした。穴の小鳥の灰色の羽根が俄かに眞つ白な銀の色になつてしまひました。小鳥は銀色の翅を擴げて高く高く唄ひながら天の方へ飛んでまゐりました。

『海燕が海の向ふへ飛んで行く！』

空を見てゐた子供たちはさう言つて、白い銀の翅の小鳥を見送つてゐました。

銀の翅の小鳥はちよつと青い海の波のなかに飛び込んで行きました。そして再び、明るい太陽の光のなかへかけのぼつてまゐりました。

眩ゆくて見てゐることはできないくらゐ小鳥の翅は、きら〳〵と輝いてゐました。

ハンスの馬鹿

山本午後

黒山のやうな人だかりの中を、二人の兄弟が――一人はミルクのやうな白い馬に跨つて、一人は石炭のやうな黒い馬に跨つてはれ〳〵した顔をして出て行きました。

ちやうどそこへ、三番目の弟がやつて來ました。この三番目の弟といふのは、二人の兄さんたちとはまるで異つてひどい馬鹿でしたから、人々は『ハンスの馬鹿』と呼んでをりました。

『兄さんたちは美しい着物を着てどこへ行くんだ。』と、ハンスの馬鹿が尋ねました。

『僕たちはこれから王様の御殿へ行つて、王女様にお會ひするんだ。お前は、王女様のお聟さんになりたいと思ふ者は誰でも行つて、王女様にお目にかゝることができるといふお布令が出たことを知らないのか。』と、兄さんたちが言ひました。

『何だ、ぢや僕も行くよ。』といつて、ハンスの馬鹿はくるりと後を向いて、家の方へどん〳〵駆けて行きました。

『お父さん、僕にも馬を下さい。』ハンスの馬鹿は家へ歸るなり、さつそくお父さんに馬をねだりました。『僕も王女様のお聟さんになりたいと思ふんです。』

『何だ、お前が王女様のお聟さんにだつて。止せ止せ、お前のやうな馬鹿にやるやうな馬はないよ。』と、お父さんは笑ひながら仰いました。

ハンスはしかたなしに、牧場から山羊を引つぱり出して來て、それに跨ぎ乘つて兄さんたちの後を追つかけて行きました。

兄さんたちの馬はもう遠くの方に小さく見えてゐました。

『ハイホフ〳〵。』

ハンスの馬鹿は威勢をつけながら、田舍の一條路を急ぎました。

『おうい、僕も來たよ。』とハンスの馬鹿はとほくから兄さんたちに呼びかけました。

『僕は途中でいゝものを見つけて來たよ。』

兄さんたちが一寸馬を止めて、ふりかへつて見ますと、ハンスの馬鹿は一匹の死んだ鳥をたか〳〵とかゝげて、とくいさうに見せびらかしてゐました。

『馬鹿、それをどうしようちうふんだ。』

『王女様に上げるんだよ。』

あんまり馬鹿々々しいので、兄さんたちはまたどん〳〵先へ駆けてゆきました。

それから、ハンスの馬鹿は遙々、破けた靴だのの、泥だらけのそんなものを拾ひ拾ひ行きました。

一人の兄弟が市の門へ着いた頃は、もう王女様のお聟さんにならうといふ人たちが、長い長い列をつくつて待つてゐました。すこしおくれてハンスも着きました。

やがて、一人々々王女様のお室へ通されました。しかし誰れも彼れも、王女様のお氣に召さないで、二口三口話すと、

『駄目、お歸りなさい。』と王女様に言はれてすご〳〵歸つてきました。

さて兄弟たちの番がまゐりました。まづ、一番上の兄さんが行きました。王女様のお室の窓には、三人の年寄と、三人の書記とが坐つてゐました。書記はそこで王女様とお話したことを一々書きとるのでした。

『大へんお暑うございます。』と、兄さんはやつとのことで口がきけました。それほど王女様のお室は暑かつたのです。

『えゝ、今日はお父さんが鶏を燒いていらつしやるものですから。』と、王女様ばおちついて申されました。

兄さんはそれから何か言はうと試つて、一生けんめいになりましたけれど、何とも言へませんでした。

『駄目お歸りなさい。』と、王女様に言はれて、兄さんもすご〳〵歸つてきました。

次の弟さんが出ました。

『何だか、むし〳〵するやうでございます』

『はい、お父さんが鶏を燒いていらつしやるものですから。』と、王女様が仰いました。

弟さんも、もうそれつきり何も言へませんでした。

『駄目、お歸りなさい。』

ハンスの馬鹿の番がきました。

ハンスの馬鹿はいか〳〵とお聟へとほりました。やつぱり暑かつた。

『やあ、馬鹿に暑いですな。』と新遠慮に言ひました。

『えゝ、私が鶏を燒いてゐるものですから。』と、王女様が仰いました。

『そいつは有難い。ぢやこの鳥も燒けるでせうね。』といつて、ハンスの馬鹿は死んだ鳥を出して王女様に見せました。

『お燒きになるなら、お隨意ですわ。ですけれど、こゝには燒くものといつたら鍋一つございませんが、何かお持ちでせうか。』

『持つてをります〳〵。』

ハンスの馬鹿は、さつそく破けた靴をぬいで、それに鳥を入れました。

『それで結構、でもお汁がお汁が……』

『それももつてをります。』

さう言つて、ハンスの馬鹿はポケットから例の泥を出して鳥にぶつかけました。

王女様はすつかりお氣に召して、早速ハンスの馬鹿をお聟さんにしました。(了)

バタ屋の妖精さん

田中純

もう可なり年を取つた一人の貧しい學生さんが、或るお家の屋根裏に住んでゐました。そのお家は或るバタ屋さんのもので、これももう隨分年を取つてゐましたが、毎日、階下のお店で商賣をしてゐました。このバタ屋さんには、一匹の小さい子供の妖精さんがくつついてゐました。クリスマスの晩にこのお店に來ると、何時でも大きなお皿にお粥やバタを入れて食べさせて呉れましたので、妖精さんは毎年クリスマスになると、此處に來ることにしてゐましたが、そのうちに、バタ屋さんがあまり親切にして呉れますから、たうとうこのお店に住み込んでしまふことになつたのでした。

或る晩のこと、屋根裏の學生さんが、蠟燭やチィスを買ふために、このお店に入つて來ました。女中も何もない學生さんは、自分で買ひに來るより仕方がなかつたのでした。蠟燭とチィスとを受け取つて、お金を拂つてしまふと、バタ屋さんとバタ屋のお妻さんとが『おやすみなさい』と言つて、お叩頭をしました。學生さんも、同じやうに『おやすみなさい』と言つてお叩頭をしましたが、そのまゝ其處に立ちどまつて、チィスを包んだ紙きれを讀み始めました。それは、そんなに裂いたりしてはならない古い書物の中の一枚でした。その書物には、いろ〳〵な詩や歌が書いてあるのでした。

『そんなものなら剛うにもつとありますよ。そいつは悪日或るお婆さんに珈琲豆をやつて讓つて貰つたのですが、あなたが五錢も出して下されば、みんな差上げてもよゝございますよ』とバタ屋さんが言ひました。

『それは有難う。それでは、チィスは入らないから、その代りにその本を呉れませんか。チィスなんかなくつたつて僕はパンが食へるのだから。こんな書物をむざ〳〵と破つて棄ててしまつたのは悪いことです。あなたは立派な人で立派な商賣人だけども、詩や歌のことはあの手桶と同じやうにちつとも解らないのですからね』と學生さんは答へました。

これは隨分失禮なことを言つたものですが、たゞの冗談ですから、バタ屋さんも學生さんもたゞ笑つてゐました。しかしあの妖精さんだけは、それが不平でたまりませんでした。このお金持ちのバタ屋さんにこんなことを言ふのは失禮だと思つたのでした。

やがて夜が更けると、バタ屋さんは店を閉めて寢てしまひましたが、學生さんはまだ起きてゐました。そこで妖精さんはそつとバタ屋さんの寢部屋に入つて行つて、バタ屋のお妻さんの舌を抜き取りました。お妻さんはもと〳〵大變なおしやべりですが、寢てしまへばもう舌なぞは入りません。室の中のものゝ上にその舌を載つけると、どんなものでも、あのお妻さんと同じやうに、自分の思つてゐることを話すのです。たゞ、一度に一つのものしか話すことが出來ないのです。

お妻さんから舌を抜き取つた妖精さんは、先づその舌を例の手桶の上に載つけて見ました。手桶の中には澤山の古新聞紙が入つてゐました。

『君はほんたうに詩や歌のことは何も知らないの？』と、小さい妖精さんは訊ねました。

『無論、知つてるさ。この新聞紙の一番おしまひのところにあるのが詩と云ふものだよ。僕はあのバタ屋さんに比べれば、たゞの手桶なんだけども、あの書生さんより澤山な詩を持つてるよ』と手桶が言ひました。

そこで妖精さんは其舌を珈琲鑪の上に置いて見ました。さあ、それがどんなことを言つたでせう。妖精さんは、バ

タ量りの上にも、お金箱の上にも載せて見ました。――が、どれもこれも、あの手桶と同じやうな考へを持つてゐました。みんな、詩と云ふものは大切にしなければならないと言ふのでした。

『あの學生をちよつと見て來てやれ』かう思つて、妖精さんはそつと裏梯子を登つて、屋根部屋のところへ行きました。其處にあの學生さんが住んでゐるのでした。鍵穴から覗いて見ると、室の中には蠟燭がともつて、その下であの學生さんが、今の階下の店から取つて來たあのぼろ〳〵の書物を讀んでゐるのでした。が、見てゐるうちに、妖精さんはびつくりしてしまひました。室の中がぎら〳〵と輝いてゐるのです。學生さんの讀んでゐる書物から、ぱつと光りがさしてゐるのです。そして、その光りが集つて、一本の大きな木になつてゐます。その木は高く空に聳えて、枝が一ぱいに學生さんの頭の上に擴がつてゐるのです。どの葉も生き〳〵と光つてゐます。どの花も美しいお孃さんの顔をしてゐます。どの果もきらきらと輝く星なのです。そして、美しい歌の聲が室ぢうに鳴り響いてゐるのです。

こんな美しいものは、これまで見たことも聞いたこともありませんでした。夢にだつて、こんな美しいものを見たことはありませんでした。そこでこの小さい妖精さんは何時までも何時までも、爪立ちして鍵穴から覗いてゐましたが、そのうちにふつと灯が消えてしまひました。學生さんが灯を消して、寢床に入つたものに違ひありません。しかしこの小さい妖精さんは、まだ戸のところに立つてゐました。美しいやさしい歌の聲がまだ聞えて來るのです。學生さんを寢かしつけて樂しさうな子守唄が聞えて來るのです。

『隨分不思議だなア』と、妖精さんは一人ごとを言ひました。『こんなことはまだ考へて見たこともない。何

時までもこの學生さんのところにゐたいなア』――と、こんなことを思つて、そのことを眞面目にいろ〳〵と考へて見ました。が、やがて妖精さんは深い溜息をついて、『いや駄目だ、駄目だ。この學生さんのところにゐては、お菊が貰へないんだもの』と言つて、階下に降りて行きました。

が、妖精さんがお店に降りて行つたのは大變よいことでした。先刻妖精さんが二階に上つて行くときに、お妻さんの舌を手桶の上に載つけたまゝにして置いたものですから、手桶はもう疲れ切つてゐました。自分の考へてゐるだけのことは殘らずもう話してしまつて、今度はまた初めから、同じことを今一度話し始めようとしてゐたからです。そこで妖精さんはびつくりして、その舌をもとのお妻さんの口の中へ入れてしまひましたが、そのお蔭で、お店ぢうのものが、お金箱から、薪のやうなものまでが、あの手桶と同じやうな考へになりました。みんなが、詩と云ふものは大切なものだと考へるやうになつたのです。ですから、その後は、あのバタ屋さんが新聞を讀んでゐる時に「繪」だの「芝居」だのと云ふ言葉が出て來ても、みんなあの手桶が言ふことだと思ふやうになつてしまひました。

しかしあの小さい妖精さんは、もう何時までもこのお店にゐて、そんなことを聞いてゐることが出來なくなりました。夕方になつて、屋根部屋の窓から灯が見えるやうになると、妖精さんはもうぢつとしてはゐられません。あの灯の光りが強い綱になつて、自分を引つぱり上げてゐるやうに思へるのです。そこでまた屋根裏に上つて行つて、鍵穴から覗いて見るのですが、見てゐるうちに何だか堪らない氣持になつて、たうとう泣き出してしまふのです。恰度、廣い美しい海の景色を見てゐると、何だか泣きたくなるのと、同じ心持なのです。妖精さんには、自分が何故泣くの

だかちつとも解りませんが、かうして泣いてゐると、だんだん好い氣持になつて來るのです。自分もあの學生さんと一緒に、あの木の下に坐つて見たらどんなに嬉しいことだらうと考へるのですが、そんなことは出來ません。妖精さんは矢張り、この鍵穴で滿足してゐなければならないのです。妖精さんの立つてゐるこの廊下には、秋の寒い風が、高い引窓からびう〳〵と吹き降して來ます。それは隨分寒い風です。が、室の中の灯が消えて、あの歌の聲が聞こえなくなるまでは、妖精さんにはその寒さが解らないのでした。

『おや、何と云ふ寒さだらう』と言つて、妖精さんはぶるぶると身を震はして、お店の隅の自分の巣に歸つて行くのです。

お店は矢張り暖かくて、氣持の好いところでした。此處に來れば、お粥やバタを盛つた大きなお皿が待つてゐます。――妖精さんに取つては、バタ屋さんのお店が、矢張り一番好いところでした。

が、その晩の夜更けになつて、妖精さんははげしい音のために目を醒しました。戸外でしきりに戸を叩いてゐるのです。そして、夜番の叩く拍子木がしきりに鳴つてゐるのです。

出て見ると、今、大火事が起つて、火が一ぱいに道に擴がつてゐるのでした。何處か燒けてゐるのでせう。このお家でせうか、お隣りのお家でせうか、兎に角、大變なことになつてゐました。すつかり慌てゝしまつたバタ屋のお妻さんは、何かを取出さうと思つて、耳環を自分の耳からはづして、懐の中へ入れました。バタ屋さんは、證文だの株券だのを取りに走つて行きました。女中さんは、自分の貯金で買つて置いた絹の肩掛けを取りに走り出しました誰も彼も、自分の一番大切にしてゐるものを取り出さうとしてゐるのです。そこであの妖精さんも、自分の一番大切にしてゐるものを取り出さうと思ひました。何を取り出さうとしたのでせう？

妖精さんは二度ばかりぴよん〳〵と梯子段を飛んだかと思ふと、もうあの屋根部屋に上つてゐました。見るとあの學生さんは、あけ開いた窓のところに立つて、すつかり落

ち着いて、お向ひのお家の火事を見てゐました。小さい妖精さんは、すぐに机の上の、あの不思議な書物を手に取つて、それを自分の赤い帽子の中に入れて、兩手でしつかりと胸のところに抱きました。この家ぢうで、一番大切な寶を助け出したのです。妖精さんはすぐに屋根に飛び出して、煙突の上に坐りましたが、燒けてゐるお向ひのお家の赤い火は何時までも、この大切な寶を抱きかゝへてゐる妖精さんの姿を照してゐました。

その時妖精さんは、自分が一番大切にしてゐるものは何であるか、自分が一番好きな人は誰であるかを知りました。が、やがて火が消えて、心が落ち着いて來ると、かう考へないではゐられませんでした。――

『さうだ。僕は矢張り二心でゐなくちやならない。あのバタ屋さんを捨ててしまつたら、僕はお粥が食へなくなるんだもの』

これは矢張り人間でも同じことです。私たちは誰でも、お粥を食べるためには、バタ屋さんのところへ行かなければならないのでした。（をはり）

さるまゐ見をきた話

船橋重一

一

月の話すには、昨日まだ日が暮れない時だつた。ある家の庭に一匹の牝鶏と雛つ子が十匹ほど遊んで居ました。

そこへ可愛らしい女の兒が出て來て、鶏どものまはりを舞りまはりました。雛はびつくりして、啼き立てたので、お親爺さんが出て來て

『なぜ、そんな事をする』と叱りました。

『一所に遊ばうと思つたの』と女の兒は申しました。

二

丁度今さきその庭を照してゐると、昨日の娘が拔足で、そつと鶏小屋に入つて、鶏を追ふはしました。私は壁の破れ目からのぞいて怪しからぬと思つて居ると、鶏の聲を聞きつけて、お親爺さんが出て來て

『何をして居るんだ』と一層ひどく叱りました。娘は大つぶの涙をこぼし乍ら

『あたし鶏にキッスして、昨日の事をあやまらうと思つたの』と言ひましたので、お親爺さんも默つて娘にキッスをしました。私も目しいはず、口といはずキッスをしてやつた(をはり)

獨樂と鞠

三宅 房子

ある坊ちやんの玩具箱の中に、獨樂と鞠がありました。二つとも坊ちやんの大切の玩具で、たいそう可愛がられてゐました。

ある時、獨樂が鞠に向つて、

『鞠さん、僕のお嫁さんになつてくれませんか。』と、言ひました。

『まあ、何を仰るんですか。あたしはこれでもいゝ家の生れですよ。この美しい革を見て下ださい。すべ〳〵してゐるでせう。あなたなんかと生れが異ふんですもの。』

鞠は獨樂なんかのお嫁さんになるもんかといつた風につん〳〵して言ひました。

『僕だつてずゐぶんいゝ家に生れたんですよ。僕の親戚だつてみんないゝ家ですよ。僕のこの木でも、しん棒でもみんないゝ家で買つて來たんです。』

獨樂はむきになつて、自分の家柄のいゝことを辯解しましたけれど、鞠はいつかう聞いてくれませんでした。

それから、顏を合はすたんびに、獨樂は鞠に向つて、お嫁さんになつてくれませんかと言つて擦みましたけれど、鞠はろくろく挨拶もしませんでした。そしておしまひにかう言ひました。

『獨樂さんいくら言つても駄目よ、あたしはもう雀さんのお嫁さんになることにきまつてるの。』

これを聞いて、獨樂はがつかりしてもう何も言ふまいと思ひました。

それからいく日もたゝないある日のこと、坊ちやんは鞠を持つて庭に出ました。そして力まかせにウーンと空へなげました。鞠はポーンと高く上りましたが、それつきりどうしたものか、坊ちやんの手にもどつて來ませんでした。坊ちやんはどこへ行つたものかと思つて、血眼になつてそこいらを探して見ましたけれど、どうしても見つかりませんでした。家中の人がみんなで軒の下や垣の外まで探して見ましたけれど、やつぱり影も形も見えませんでした。

すると、獨樂が、いかにも知つたふりをして言ひました。

『鞠さんのことなら、あたしがよく知つてゐますよ。』

『どこだ、お前知つてるんかい。知つてるならなぜ早く言はなかつたんだ。側今あぶん探したんだよ。』

坊ちやんは少し元氣づいて言ひました。

『知つてはゐますが、もう歸つては來ませんでせう。』

『それはどうしたんだ。』

『いつだつたか、鞠さんがこんなことを言つてましたよ。あたしは雀さんのお嫁さんになることにきまつてゐるの。」つて、今頃はもう雀のお宿で寢てゐるでせう。』

『ちやあの瓦の下にゐるんだれ。』

『おほかたさうでせう。』

『何だ、つまらい。』

坊ちやんはそれからはいつも獨樂を相手に遊んでゐました。獨樂はさびしさうにくる〳〵まはつてゐました。そのうちに、だん〳〵年をとるにつれて、獨樂はきたなくなつて來ました。それでも坊ちやんは、赤い色を塗つたり、青い色を塗つたりして、可愛がつてゐました。それでもだん〳〵きたなくなつて來ましたので、こんどはたいそうなお金をかけて、藏で斷金したり、金で鍍金したりして遊んでゐました。

ある日のこと、坊ちやんがいつものやうに獨樂をまはして遊んでゐますと、どうしたはづみか、塵介箱の中へはいつてしまひました。坊ちやんは夫を知らずにゐました。

獨樂は何だかうす汚ないとこへ來たもんだと思つてよく見ますと、そこは菜つ葉だの、魚の骨だの、そんなものがぐしや〳〵していやな臭までしました。

またよく見ますと、何だか變な物が一つありました。林擒の腐つたのかと思つて見てゐますと、何かぶつ〳〵言つてるやうでした。

『あの獨樂さんですか。』と、だしぬけに林檎の腐つたやうなのが言ひました。獨樂がびつくりしてゐますと、また、

『あたしよ〳〵。』と言ひました。『もうお忘れになつて、こんなみすぼらしいなりになつてしまひましたから、お忘れになつて。坊ちやんの玩具箱にゐました鞠よ。』

『まあ、鞠さんですか。それはまた一體どうなすつたんです。』と、獨樂はやつと安心したやうに言ひました。

『いつか坊ちやんに力一ぱい投げていたゞいたので、あたしはいゝ氣になつて、とんで上りましたが、しまひにとう〳〵こんな所へおつこつたのよ。それつきり誰も拾ひに來てくれないんですもの、こんなところでだん〳〵年をとつて、見ちがへられるほどやつれてしまひましたわ。』と言つて、鞠はしく〳〵泣き出しました。

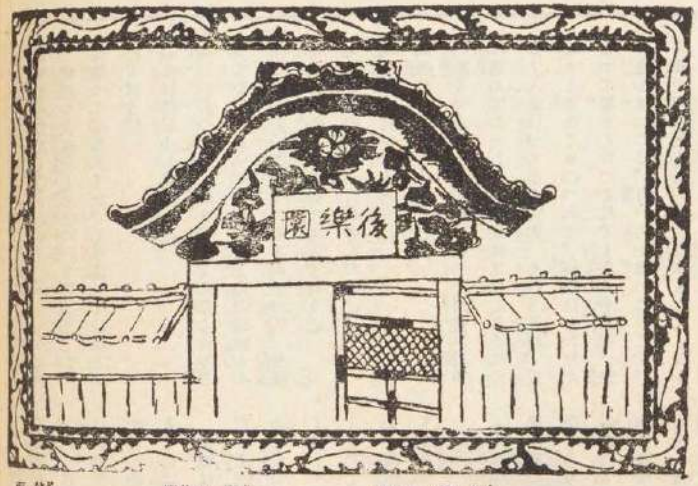
『さうでしたか……』

二人がかうして話してゐると、人の近よつてくる足音がしました。

『おや、坊ちやんの大切の獨樂がこんなとこに落つこつてる。』と言つて、塵芥箱の中から獨樂を拾つて行きました。

獨樂はそれから綺麗に掃除してもらつてまた坊ちやんにくる〳〵まはしていたゞきましたが、鞠は可哀さうにだん〳〵腐つて行きました。（をはり）

「門」（賞）東京市番町小學校尋四　岡島眞理子



童謠　野口雨情選

草の露（佳作）

山口縣玖珂郡岩國魚町　末廣薫雄

草の露　きら　きら
螢がとまつて吸つてゐた
五色の露　きら　きら
お天道さま　吸つてゐた

ねむの花（佳作）

朝鮮京城本町四〇　山敷春郎

眠い眠い　合歡木の花
ゆつさ〳〵　眼をさませ
眼玉がとろける　眼を醒せ

南瓜（佳作）

京都市上京區岡崎神社向　近江谷益代

鉦平さんの畑　小ッちやな畑
雨瓜に狐瓜が　生えたか　見たか

地藏樣

東京市京橋區銀座三ノ一　粒樂白雨

とんぼ　とんぼ　鹽辛とんぼ
地藏さんの頭に　とまつたとんぼ

夏螢

北海道札幌區南三條西八丁目　小西曉

螢　螢　夏螢
螢の提灯光らせろ
びかん　びかん光らせろ

芥子坊主

茨城縣眞壁郡下館町　村上又一

坊主々々　芥子坊主
お顔もお頭もまん丸だ
ぐるりと向いてもまん丸だ

狸

大阪市北區若松町二七　渡邊清

とんがり山の　木の下に
狸が三匹あつまつた
ぽんぽこ太鼓を　叩いてた

「預邊」愛知縣半田小學校尋四　望月ゆり子

幼年詩　若山牧水選

ぱくろさん（賞）

福井縣大濱小學校高一　田中健吉

シッチヨイチヨイ
シッチヨイチヨイ
ぱくらうさん
大牛小牛
前後につれて
シッチヨイチヨイ
シッチヨイチヨイ

かに

和歌山縣粉河小學校尋四　益田一夫

かにが大ぜい集つて
小石の家をたてゝゐると
にはかに水が流れ出し
かにのお家はころ〳〵ころ

ほーほ鳥

和歌山縣粉河小學校尋四　山田義春

ほーほと鳴いた
竹やぶで鳴いた
ほーほ鳥鳴いたら
月が出た

ホタルノウタ

長野縣上伊那郡宮田村　西田二郎

ホタル〳〵光レ
ホタル〳〵光レ
ピンノ中ノホタル
オチヽチヤルデ光レ

夕燒雲

長野縣諏訪小學校高二　宮澤始

昨日も今日も
夕燒雲に
追はれた鳥
にげるにげる
夕燒雲に
追はれた鳥

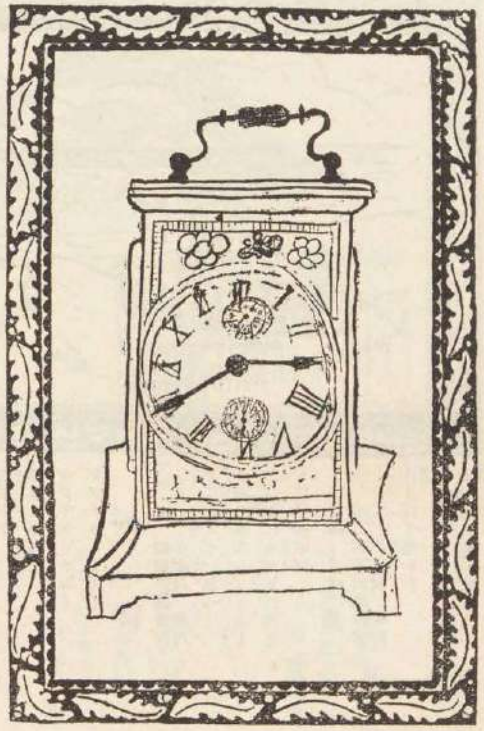
理髮屋のをぢさん

大阪市濟美小學校高一　澤正美

理髮屋のをぢさん
お客のあたまを
撫くり〳〵
ばうずにしちやつた

□掲載外佳作　△夏の公園　京都　建田恭一△ねぎ坊主　兵庫　澤井清△かじやさん　和歌山　北本政一郎

自由畫「時計」(賞)　東京市十思小學校尋四　宇野弘



綴方

どぜう取り(賞)

岡山市出石小學校尋四　小橋静子

そうつとしのび足で石がきのそばへ行つた。見るとあちらにもこちらにもどぜうがたくさん居る。私はひしやくを持つて來てどぜうを取りにかゝると、どぜうはいきなり土の中にもぐりこんだ。しばらくすると、どぜうがあたまだけ少し出した。それで取ちうとするとからだを皆出して、うなぎのやうにうねつてどこかへかくれてしまつた。私はくやしくつてたまらないから、こんどは網を持つて來て、水の中へつけておいて、穴の中を竹でつつくと、一匹の大きなどぜうが穴の中から出て、よいぐあひにその網の中へはいつた。私は網を水からひきあげてどぜうを盆だらひの中に入れてやつた。その時は大そううれしかつた。又川のへりへ行つて見ると、小さなどぜうがたくさん居たが、私が來ると又土の中にもぐつてあわをふいてゐた。私はその小さなどぜうがにくらしかつた。もうどぜうを取るのはやめて家の中へはいつた。

黒猫

愛知縣愛知郡猪高村字高針　淺井義經

夜ほどんより曇つて、ひや〳〵した風が吹いてくる。少し頭が重くるしいので裏の方へ行つてみる。板塀の上にいつも來る黒猫が居たシツと云つて見た。

と、こつちを向いた。シツ〳〵とつゞけさまに言つて、小石を投げてやると、ニヤオとなきながら二足あるいたが又とまつてこつちを見て居る。

なんだかにらまれる樣でおふ氣もなくなつたので家の方へきた。そのうちに雨が降つてきた。

綴方

鳥石山へ

福島縣二本松第一小學校五　菊地チヨ

『あゝこはい〳〵』とためいきをつきながら坂を上つて行きました。もしや蛇でもゐはしないかと思つてだん〳〵森の中へはいつて行くとなんだか新しい若葉のにほひがぷんと私の鼻をつきました。綠の葉の上に眞赤なつゝじの花が咲いてゐました。私はそのそばへ行つて『あらこゝにつゝじの花がゐた』と大聲を立てると私の友達が來て『ほんとによ』と言つてそこでつゝじの理科をしらべてゐました。すると私の側をする〳〵と長い物が通つて行きました。私は『きやつ』と聲を立てゝ皆んなの所へにげて行くと皆んなも驚いて『なんだい〳〵』と言つた。そのうちに先生が『集りなさい』と言つたので皆んな先生のまはりに集りました。私は又何か來はしないかと中の方へはいつて行きました。この時ばかりは皆んなの顏は若葉にかこまれて青白く見えました。

向ふの森ではカツコ鳥がしきりに誰かを呼ぶやうに『カツコン、カツコン』と鳴いてゐました。

なめくぢら

福井縣高濱小學校高一　魚住路二

『コーチヨイ』と言つて妹は僕の側へかけよつた。僕は『何ヤ！』と言つて妹に寄れると『ソレソコニイナア』と言つた。僕は『何處に』と言つて後をふり歸つてみたが、何も居ない。よく〳〵そこらを見廻してゐると僕の足の側に大きななめくぢらが横たはつてゐた。ねばつた光つた體を見ると氣持が惡くなつてつばきを吐かずには居られない。僕は其處らあたりに落ちてゐた竹を拾ひなめくぢらをつくと、なめくぢらは丸くなつて竹にまきついた。僕はなめくぢらのついた竹を竹藪の中へ捨てた。妹はやつと安心した樣な顏をして笑つた。

學校のかね

東京市外大久保小學校尋四　桂井邦子

ぢやん〳〵とこづかひのならすかねがきこえると、今までおもしろさうに遊んでゐた人人は友だちのかたに手をかけてはしつて行く。又話をしながらのろ〳〵あるいてくる。やがて二度目のかねがなると先生がだいの上におのりになつてがうれいをおかはになると みんなはおとなしくしてをつた。かねはまだなつてゐた。

水上飛行機

東京市愛應義塾幼稚舍六年　松下春三

僕はいきもつかずに話しました。『それでね小人は御殿の中をずん〳〵は入つて行つたの。そしてもうすぐ王樣の御部屋には入らうとした時。』

『パーラパラパラ』アツ飛行機飛行機と言ふ聲がきこえました。僕を初め話を聞いて居た者は皆あわてゝ二階に上りました。そして、えんがはからキツトにらむ樣に大空を見た時一臺の水上飛行機が、雲の間から悠々と現はれました。一同の目は皆飛行機に注がれました。機の下にボートをつけた雄々しい水上飛行機の委はやがて、西北さして飛んで行きました。

□掲載外佳作　△ある晩　兵庫　柳千代子△夕方　京都　大山しげ子△スキタロ　上海　長澤千世子△夕方　長野　小松政敏　△蟲　兵庫　福田モト(以下通信欄)

（通信）

自由畫に就て

山本　鼎

△今月は成績の良い方でした。でもやつぱり人の畫を寫したものがかなりありますね。

△皆さんは、お手本を寫すのと、實物を勝手に描くのとどつちが面白いでせうか。

△此處に、土びんが一つあるとしますね。皆さんは其土びんを一度人に描いてもらつてその畫を又眞似して描く――そんな事をするよりは、ぢかに實物の、土瓶をお手本にする方が良いのですよ。土瓶には姿もあり形もあり色合もあるでせう。それを見えた通りに描いて御覽んなさい。

△長野市の宮下君室賀君の鉛筆畫は良いです。あんな風にたくさん寫生して下さい。

△宇野弘君の時計の寫生畫は大そう良く出來ました。これから毎月いろ〳〵な寫生畫を見せて下さい。

△今井[illegible]次郎氏へ――高井靜雄さんの『養狩』の畫は結構です。私はあゝした自由畫――即ち着想も、技工も小供自身の力で表現されたものを奬勵したいと思つて居ます。

△夢浦茂一氏へ――此雜誌へ大人の畫を御持ち込みは不向きと存じます。御送りを畫は何れもいけません。何となれば、其處に印象も感覺も認識も甚だ不鮮明であり、自然の何ものに感動して描いたのだか更にわからないからです。

あなたはもつと目を洗はねば駄目です。『作る事の出來るのは見るが故です。』このロダンの言葉をしんみり考へて御覽んなさい。個性的自由は其處に生長するのですから。

童謡の選後に

野口雨情

いつも云ふ通り童謡は、小説や戯曲とは違ひますから、事柄をうたつたのではいけません。事柄をうたふと言葉の上に温味がなくなつて了ひます。事柄なんかは構はずに、言葉の調子でうたつて下さい、キツとよい童謡が出來ます。米廣蕨雄君の『草の露』山敷春郎君の『れむの木』近江益代君の『南瓜』などは事柄でないだけ面白く思はれました。

綴方を讀んで

選者

こんども、ずゐぶんいゝのがありました。けれども今月は特別號で、本文の記事にたくさんとられましたから、自由畫も幼年詩も綴方もたくさん出せませんでした。いゝので來月に廻したのもあります。

『どぜう』なお書になつた小橋さんはたいそうお上手になりましたね。淺井君の『黒猫』はいゝものですが、子供らしいところがちつとも出てゐません。高濱學校から來たのは大抵いゝものでしたが、その中では魚住君の『なめくぢら』が一番よく出來てゐました。揭載外のぶんで、とりわけ私の目を惹いたのは、佐藤勝熊君、土屋ゆきを君、三輪雅夫君、藤井松洋君、保坂久春君、塚本篤雄君、萩原信夫君、寺田索一郎君、杉田みのる君、新津孝一君、坂田露香君、大西貞雄君、水藻詩郷君、山田京二君、芳香信愛君、加藤辰五郎君　榎本喜芳君、天津研三君、小山夢雄君、小野廉乎君、本井商羊君、間山祈磨君、庭田義雄君、花形惣之助君等のものでありました。次號にその中の數篇を揭げることに致します。

さんの『學校のかれいも短いものでよくできてゐました。梅さんの『ある日』はだい分直しました。よく讀んで下さい、長澤さん、もつと異つたのをお出し下さい。

それから、先月發表しましたうちで、東京府大井小學校尋三、中岡康男君の『松本君』は尋常三年の讀本からとつたのです。たいへん惡いことです。皆さんはあんなまねをしてはいけません。

應募童話選評（承前）

選者

大西君の『お留守番する日』は童話といふよりか小品といつた風なものでした。氏は童話的氣分を多分にもつてをられますが、氏の克明な描寫は全體の柔かい感じをぶち壞して了ひます。總じて、童話の場合には小説に見るやうな緻密な寫實は効果のないものです。

吉田君の『お鶴樣の話』はどこか氣味の惡い感じがします。無氣味な話や物すごい話や殘酷な話を童話にするにはよほど老巧な筆致をもたなければ、大抵の場合失敗します。

小野君の『源助爺さん』や、牧野君の『雀と燕』などはかなりいゝ方でしたが、なほ一段と努力して頂きたく思ひます。

金の船消息

▼『金の船』童謡會　毎月一回最終土曜日の午後三時から『金の船』童謡愛好者諸君が集つて、童謡の習作と普及とにつとめることになりました。其都度野口雨情先生が童謡について有益なお話と、朗讀とがあります。出席御希望の方は、當任幹事の四谷區舟町三番地都築益世氏宛に御照會下さい。詳細をお知らせ致します。

▼讀者欄の擴張　日增に皆さんの投稿がふえて來たので、來月號から讀者欄を擴張致します。童謡も綴方も幼年詩も、もつと澤山づつ載せることに致します。それから、讀者諸君の通信も募集します、通信の種類は、皆さんの學校の消息でも、皆さん自身の消息でも、そのほかなんでもよろしい。

▼西條八十先生の『唄』（九月號）四行目綱は網の間違ひです。

▼『金の船』の合本　途中から『金の船』の讀者になられた方の便宜を思つて、『金の船』初號より六號まで六册宛の合本が出來て居りますから、『金の船』編輯所へ御申込み下さい。合本料も送料もいたゞかずに原價の雜誌代（一圓五十錢）だけでお送りします。

▼『金の船』誌友　誌友の都合でしばらく休んでなりました推奬の童話と童謡も、來月號から揭載することに致します。

▼自由畫佳作　△踏切　東京　平川忠雄△驛隊　朝鮮　永上友治△蕊姑　兵庫　福田モト

（右の三點は山本先生の御選び下さつたのでしたが誌面の都合で出せませんでした。）

▼綴方佳作　△松竹梅　大阪　井上芳子△二十錢銀貨　東京　小菅野圭介△果物の木　福島　加藤ハナ子△こうせん　福島　吉田ヨシノ△去年の夏休み　熊本　富田房子△くはげきは　栃木　大橋エイ子△夏の夜　栃木　岡部マス子△月　朝鮮　北村邦子

▼『金の船』誌友（つゞき）△兵庫　服部準治君△東京　藤田圭雄君△東京　佐藤信雄君△東京　長野英夫君△朝鮮　和田靜枝君△秋田　小幡友太郎君△岡山　日比野淨君△長野　柄山岩雄君△北海道　森崎みさほ君△東京　牟田輝子君△東京　山田京二君△鹿兒島　小原巽君△長野　肥後傳君△東京　庄田佐智子君△岩手　鈴木重男君△秋田　木内貞彦君△福岡　角田四郎君△三重　熊澤正君△岩手　齋藤實夫君△青森　澤田きの君△愛媛　日野貞子君△長崎　増島芳藏君（以下次號）

▼少年少女の創作募集

（原稿は東京府下田端三五一番地「金の船」編輯所へ送って下さい）

自由畫　**山本鼎先生選**

自由畫は、お手本や雜誌の畫なんか見ずに、花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顔なり、なんでも好きなものを、かつてに描いて下さい。

幼年詩　**若山牧水先生選**

幼年詩は、山なり森なり花なり、何でも見たり感じたりしたことを、みなさんの好きなやうに詩にして下さい。

綴方　**編輯部選**

綴方は、みなさんが見たこと、思ったことを、そのまゝふだんつかってゐる言葉で書いて下さい。

▼繪日記を募る

▲繪日記とは、其日々々に、「見た事、感じた事、考へた事、聞いた事――なんでもいゝから畫にかき度いものを描くのです。むろん其わきへ文章で日記をつけていゝのです。

▲繪日記は、半紙を四つ折りにして綴ったのでも、二つ折りにして綴ったのでもよろしい。なるべく墨で描いて御覽なさい。

▲出來たらどれでもよいから、好きな一冊を送って下さい。日記ですからお戻しすることにします。

▲良い繪日記は雜誌へ出し、賞品を差上げます。選は山本鼎先生がなさいます。

▼童話童謡募集

吾々はかくれたる童話、童謡作家を紹介したいが爲めに、毎月童話童謡を募集いたします。

期待は勿論作家の自由ですが、内容形式は共に從來の型を破った、眞に藝術的な作品を求めます。

原稿の枚數は、童話の場合には十行廿字詰原稿紙八枚以内、童謡の場合は二十行以内。優秀な作品は本欄に掲載し、相當稿料を差上げます。選者は、童謡は野口雨情先生。童話は當分の内編輯部でいたします。

▼「金の船」誌友募集

「金の船」の誌友を募集いたします。誌友になれば、いろ〳〵の便宜や特典がございます。誌友規則を知りたい方は編輯所宛にお申込み下さい。すぐお知らせします。

東京府下田端三百五十一番地「金の船」編輯所

定價一冊三十錢　送料壹錢（本號に限り三十五錢）
三ヶ月分三冊（送料共）九十錢
半年分六冊（送料共）壹圓八十錢
壹ヶ年分十二冊（送料共）三圓四十錢
振替口座東京參〇五七貳番

廣告料は御照會次第お答へいたします

（送金）

▽御註文は必ず前金で御拂込み下さいう御座います

▽送金は小爲替でも切手代用でも宜敷

▽切手代用は（壹錢切手）一割增に願ひます

（意注の）

▽御註文の場合は第何卷第何號よりと云ふことをはっきり書いて下さい

▽住所姓名は丁寧に分りよく御書きください

大正九年九月四日印刷納本（毎月一回）
大正九年十月一日發行（一日發行）

東京府下田端三百五十一番地
編輯人　齋藤佐次郎

東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地
發行人　横山壽篤

東京市小石川久堅町百八番地
印刷人　大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所

東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地
發行所　キンノツノ社

最新刊

松本苦味編

世界童話集　たから船

東京市日本橋角
振替東京二三八番
大倉書店

洋裝四六判全一冊
紙數參百七十餘頁
口繪三色版一葉
挿圖寫眞版廿四枚入
定價金貳圓參拾錢
（郵稅書留金十八錢）

本書の目次

◎ねぼけ小僧出世物語（チエスコ・スロ童話）◎一擊九匹（チエスコ・スロ童話）◎いたづら兎（北米印度人童話）◎果報は寢て待て（小亞細亞童話）◎謎（アルメニア童話）◎お猿の惡智惠（ブラジル童話）◎兎のしっぽ（ブラジル童話）◎蝦蟇の皮（ブラジル童話）◎魔術師と少年と（デンマーク童話）◎青髯子（フランス童話）◎法螺くらべ（印度童話）◎三人兄弟（イタリア童話）◎ミツキイと饂飩と（イタリア童話）◎福袋（イタリア童話）◎土龍の婿選み（朝鮮童話）◎坊さんと虎と（朝鮮童話）◎不思議な袋（ロシア童話）◎魔法の劍（セルビア童話）◎片羽の鳥（スペイン童話）◎怪獸狩（スペイン童話）◎天女と獵人と（ハンガリイ童話）◎人間が石となった話（スキッツ童話）◎幽靈山（ニユウ・ジキラン土人童話）◎豹のしくじり（アフリカ土人童話）◎嘘（アフリカ土人童話）

昇曙夢譯編
露西亞民衆文學全書第一編
ろしあお伽集
洋裝四六判全一冊
郵定價金壹圓十八拾錢
稅書留金十八錢

昇曙夢譯編
露西亞民衆文學全書第三編
ろしあ童話集
洋裝四六判全一冊
郵定價金壹圓六拾錢
稅書留金十八錢

大正八年十月十六日（第三種郵便物認可）　大正九年九月四日印刷納本
大正九年十月一日發行（毎月一回一日發行）

磨齒ンオイラ

東京　キンノツノ社　發行